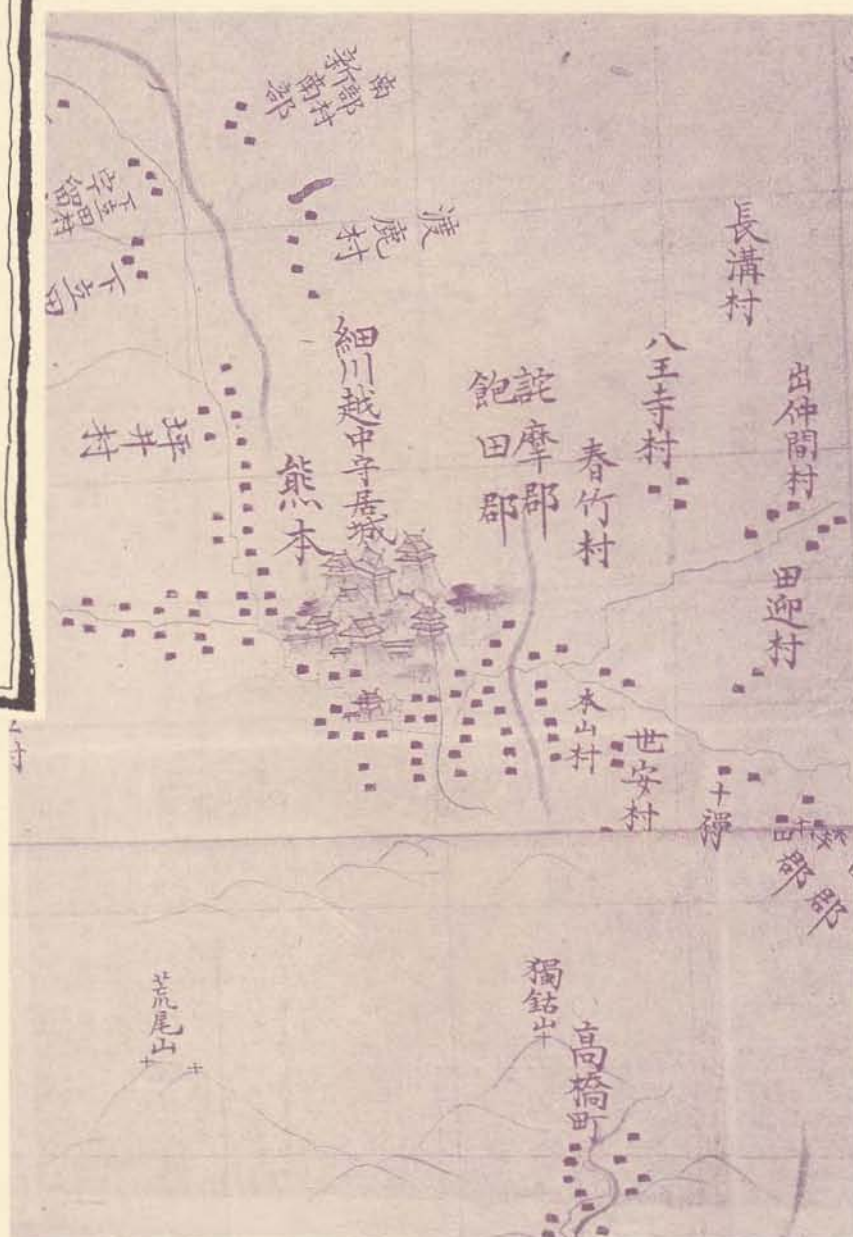


史料と伊能図

伊能忠敬

研究

二〇〇三年 第三一号



表紙図解説

米國議會図書館蔵 伊能大図部分「熊本城」付近

一月一日から研究会のホームページ史料室で、米國議會図書館で撮ってきた写真五九枚を公開し、共同通信を通じて日経および地方紙で周知した。本図はそのなかの一枚である。

すでに昨年共同通信から配信したので、それぞれ当該地方紙には掲載された写真ばかりであるが、全図を見ることはできなかった。今回坂本幹事の尽力による一括HP掲載で、どの図も見られるようになり、ダウンロードも可能となった。

平成一六年のアメリカ大図展に向けて多少でも話題になつてくれれば、と思つたのだが、暮れのテスト期間も含めると一月九日現在約二万件のアクセスがあつて驚いている。

前号では徳島城の周囲を紹介したが、本図は熊本城周辺である。伊能大図では、民家は浅黄色の屋根だけ、社寺は大小に応じて、小寺は屋根だけ、大寺は建物も含めて景観を描いた。五重塔などは丁寧に記されている。なかで最も美しく描かれたのはお城である。

議會図書館の大図は実用の写しなので、民家は黒の四角な刻印のみで全体的に簡略化されているが、お城だけは綺麗に描いている。画工たちが、ここだけとは腕を振るつたのかもしれない。

(渡辺)

(題字は伊能忠敬の筆跡)

目次

伊能図新時代へ向けて

新春エッセー

ハルビンにて「老師兼留學生」の記

新しいことを知る喜び

芳名録よりこぼれ話

研究ノート

伊能忠敬の測量技術

伊能古文書教室『家牒』(四)

用語の知識・月距法とは

『伊能家文書紹介22』高橋景保の登場

蝦夷地での伊能忠敬の先触等

校歌にみられる「伊能忠敬」

地域史料紹介

史料探訪 最終本・伊能図の消息など

伊能忠敬の江戸在住日記(一〇)

最近の話題

織本病院劇団「伊能忠敬」を公演

柏木久兵衛家文書を調査

「筑前の長崎街道を歩くつどい」

歩行回数が一〇〇回に

支部便り 佐原支部・赤水の地図を訪ねて

九州支部・入船山記念館訪問記

忠敬談話室だより

(入会案内・編集後記)

渡辺 一郎

岩城 元

佐久間達夫

伊能 陽子

金窪 敏知

小島 一仁

土肥 規男

安藤由紀子

堀江 敏夫

成家 淑子

渡辺 一郎

佐久間達夫

渡辺 一郎

渡辺 一郎

渡辺 一郎

渡辺 一郎

渡辺 一郎

渡辺 一郎

渡辺 一郎

渡辺 一郎

渡辺 一郎

渡辺 一郎

渡辺 一郎

渡辺 一郎

伊能図新時代へ向けて

渡辺 一郎

昨年は、伊能忠敬ブームも少し静かになるかと思いましたが、そうでもありませんでした。一月に日本テレビ「知ってるつもり」に出演して、私共夫婦が一昨年三月にアメリカで発見した伊能大図を御紹介しましたが、視聴率一二、一％でした。

四月には『東京国立博物館蔵伊能中図原寸復刻版（武揚堂発行）』を会員の清水靖夫、長岡正利、小島久武各氏と共著で上梓しました。特価販売の御案内をさしあげましたが、安い定価設定と盛り沢山の内容は、小島久武社長の大変な熱意の産物で、出版界の人たちは驚いております。

八月には東京国立博物館で、伊能忠敬の上司の天文方・高橋景保から幕府昌平坂学問所に提供された本物の伊能小図三枚が発見され、調査確認と報道発表に協力しました。NHKニュースおよび各新聞で全国的に報道されましたので御承知のとおりです。正式な上呈本と軸装がちがいますが、針穴本で、幕府機関に公的に渡されたと考えられますから、限りなく正本に近いものといえます。

そう考えると気になることがあります。この小図には天測地の☆印がありません。これをどう考えるべきか迷っています。東京都立中央図書館の小図には☆があるのです。こちらにも、老中阿部伊勢守が天文方に命じて作らせたと来歴がはっきりしています。天文方には☆印を描いた小図と描かない小図の二種類があったことになります。上呈本はどちらだったか。今回の小図を正本に近いと判断すると、上呈本には☆はなかったことになります。

実際に、東京国立博物館の中図（当時の老中首座・松平信明への謹呈品）にも、英国の測量艦隊に渡された小図（幕府軍艦方旧蔵グリニッチ海事博蔵）にも☆はありません。いまのところ、上呈本には☆はなかったのかなと考えています。

アメリカ大図の国内展示は、三月に国土地理院はじめ日本地図センター、日本測量協会、全国測量設計業協会連合会、日本土地家屋調査士会連合会、日本ウオーキング協会、伊能忠敬研究会、共同通信社、中日新聞社による実行委員会を立ち上げ、検討してきましたが、現物の博物館展示と、原寸大複製品の床面展示を、平成一六年度に国内各地で開催する予定で準備を進めております。NHKも主催者に加わっていただくことになっております。逐次、情報をお知らせしますが、アメリカ大図複製のためのデジタルデータの実験データが一部年末に到着しました。第一歩が踏み出されたわけです。小生は実行委員会事務局長を仰せつかっていますので、今後とも努力したいと考えております。一層の御声援・御協力をお願い申し上げます。

新春エッセー

ハルビンにて「老師兼留学生」の記

岩城 元

「いい加減さ」に惚れて

昨年から「老師（教師）兼留学生」と称して、中国は黒龍江省ハルビン市のハルビン理工大学にいる。その前、朝日新聞社にいたところ「伊能ウオーク」の裏方の責任者みたいなことをやっていたから、「人生を二度生きた忠敬さんに刺激されたのだろう」と、えらく買いかぶってくださる方もいる。が、そんな大袈裟なことではない。

伊能ウオークの前、一九九五年と九七年の二回、「平成の遣唐使」と称して奈良から西安まで二カ月かけて歩いたことがある。日本ウオーキング協会と朝日新聞社の共催事業だった。この時も裏方の責任者をやっていた。そのころから、中国とはなんとなく肌が合うなあ、何よりもそのいい加減さがいい、大雑把なところがいい、一度住んでみたいなあ、となるとなく思っていた。

そのうちに新聞社を定年になり、そうだ、中国に行こう、同じ行くならまだ行ったことのない東北地方（旧満洲）にしよう、留学生になり中国語を勉強しよう、と特段の脈絡もなしに思いついた。同じ東北なら遼寧、吉林、黒龍江三省のうちで最も北の黒龍江省がいい、なにしろ省都ハルビンは「東方の小パリ」「東方のモスクワ」と言われている。これも脈絡のない話だが、いずれにしろ行く先は「ハルビン」と

決定した。我ながらいい加減で大雑把なことである。

この点でも、忠敬さんとは天と地ほどの開きがある。しかし、いい加減に決めたこととはいえ、家族を説得したりするには「大義名分」がいる。この大義名分だけは他人の説もお借りして、忠敬さんにそうは劣らないもの（？）を考えついた。



曰く——中国東北地方は今でこそ上海などの沿海部に比べて遅れている。だが早晚、南北朝鮮が統一され、朝鮮半島を経て日本へ、または逆に、ヒトとモノとカネが自由に動くようになれば、大きく発展

するに違いない。うまくいけば、東北地方から朝鮮半島、日本にかけての地域は北東アジアの、ひいては世界のひとつの核になる。その時に備えて日本人は中国語、韓国・朝鮮語をもっと学んでおくべきだ。ロシア沿海州もその発展の仲間になるだろうから、ロシア語もかじっておくに越したことはない。歴史を思い起こせば唐の時代、この東北地方から朝鮮半島北部にかけて「渤海」という盛国もあった。当時の日本とも頻繁に行き来していた。

さらに曰く——で、まず中国語を勉強するなら、黒龍江省ハルビン市が最適地だ。中国語は地方により発音の差が大きいが、この地の人は日本の標準語にあたる「普通語」を話している。韓国・朝鮮語を勉強するのも向いている。北朝鮮に接した吉林省には及ばないが、ハルビンにも朝鮮族が多い。ロシアに近いから、ロシア語の勉強だって好都合なはずだ。

最後に曰く——僕も還暦を迎えたが、あと四〇年は元気に生きるつもりだ。ついては、この新しい世界に身を置いてみたい。まずは、中国語の勉強から始める。ハルビンへ行く。当分、家を留守にする。

というような大義名分をかみさんに話したら「はい、はい、どうぞ」と二つ返事でOKが出た。亭主が定年後、これまで以上に家にいないことがうれしかったのだろう。ニコニコ顔で送り出してくれた。

老師業① 留学生專業のつもりが……

ハルビン行きを決めた時、最初は老師業をやる予定ではなかった。

留学生としてもつばら中国語の勉強に励むつもりだった。大学も別のところに決めていた。ところが、留学ビザも取り、用意万端整えてまもなく出発という時になって、事故に遭った。

サッカーをやっていたら、至近距離で相手のけたたボールが右目を直撃し、網膜剥離を起こしてしまった。入院、手術、養生と続き、留学もいったんキャンセルした。仕方なくぶらぶらしていたが、医者が「たばこは目に絶対よくありませんが、アルコールは関係ありません」と言うものだから、そちらのほうにも出費がかさみ、用意していた留学費用もどんどん減ってきた。

そんな折、耳寄りな話を聞いた。ボランティアでちよつとだけ学生に日本語を教えれば、留学生としての授業料は要らないし、宿舍も無料で提供してもらえるというのだ。よしこれこれ、と知り合いの中国人に相談してみた。すると、翌日には「ハルビン理工大学ではいかがですか」と言ってきた。なんでも、彼の妻の友人がハルビン出身で、その父親がハルビン理工大の教授をしている。そこへ電話したら日本語科へ問い合わせしてくれ、すぐOKになったそうだ。そんなわけで、当初の予定から半年遅れでハルビンにやってきた。

ハルビン理工大学は学生数約一五、〇〇〇人。名前の通り理科系の大学だが、文科系の学院（日本で言えば学部）もある。僕のいるところは人文社会科学学院と言い、日本語科、英語科、芸術科がある。

日本語科は一、三年生が各一〇〇人、四年生が六〇人ほど。英語科と拮抗している。日本語科の老師は一六人ばかり、うち日本人が僕を



ハルビン理工大学

入れて四人。日本人の三人はもちろん僕よりずっと若く、二人は二十歳前半の女性、一人が四十歳の男性。女性二人は職業として、つまり給料をもらって老師をやっている。男性は日本国派遣の青年海外協力隊員。四人とも同じ棟の宿舎に住み、仲良くやっている。

老師集② 肩がこる「作文」の添削

中国の学期は欧米などと同じく九月に始まる。その新学期で僕の担当は四年生の「作文」と「精読」。週に五こま、計一〇時間の授業を持っている。ボランティアだから、他の日本人老師より時間数はずっと少ない。授業のある日も月水金の午前中だけだ。

と言うと、楽そうだけど、結構忙しい。「作文」は、大野晋さんが『日本語練習帳』（岩波新書）に新聞の社説の「縮約」「要約」が作文力を高めるのに大変に効果がある、と書いておられた。これをそのまま借用させていただいている。約一二〇〇字の社説をまず四〇〇字に縮約させ、次には二〇〇字に要約させる。「縮約」というのは大野さんの造語だ。

寮に戻ってから、学生に書かせた縮約、要約に朱を入れ、コメントを書く。これに結構時間がかかる。よく出来た奴だと、一〇分やそこらで済んでしまうが、そうでないのになると「ウーム」としばらく唸ってしまふ。二〇分、三〇分がいたずらに過ぎていく。大野さんが日本の大学生にやらせたことを、日本語を学んで三年余の中国の大学生にやらせるのだから、無理のないことかもしれない。



教室で筆者と学生たち

毎週、六〇人ほどの学生についてこれをやっている。最近、別の日本人老師がうち二〇人を担当するようになったので、添削は四〇人ほどに減り、少しは楽になった。が、真面目にやっていると、ほんとに肩がこってくる。漢方の病院で三〇分間、二〇元（約三〇〇円）の按摩にちよくちよくお世話になっている。

老師業③ 未知との遭遇

「精読」というのは、大学から渡された教科書を基にやっている。中身は日本の高校の国語教科書を思い浮かべていただければ、当たらずといえども遠からず、いろんな人の小説、評論、随筆が（長いものはその一部分だけが）載っている。詩もよくある。

最近僕がやったもので言えば、東山魁夷『風景開眼』、吉田精一『近代の夜明け』、小田実『何でも見てやろう』、野坂昭如『赤とんぼと油虫』などで、詩では島崎藤村『千曲川旅情の歌』、金子光晴『富士』などが出てきた。それほど難しい教材ではない。けれど、「未知との遭遇」と名づけたのだが、僕には初対面の作品も少なくない。

長年新聞記者をやっていたけど、経済記者のことが多かった。小説や詩は苦手分野の一つだ。例えば、志賀直哉『暗夜行路』が次の授業に登場する。志賀直哉の名前はもちろん知っている。「小説の神様」と言われたことも知っている。戦後、国語を日本語からフランス語に変えよと主張した話も承知だ。だが、知っているのはその程度で、恥ずかしいながら『暗夜行路』は読んだことがない。短編の『城の崎にて』『小僧の神様』くらいならどこかで読んだような気もする。

だけど、それでは困るので、夏休みで日本に帰った折、志賀直哉関連の本を買い込んだ。『暗夜行路』も一冊ちゃんと買ってきた。教科書に出てくる『暗夜行路』は「序詞」の部分だけだが、老師としては一応全編を知っておく必要がある。いずれにしろ、これで用意万端、怠りなしだ。そして、ハルビンでいざ読もうとすると、文庫本『暗夜行路』の背表紙に「前編」と書いてある。エッ、『暗夜行路』ってそんなに長い小説なの？ 後編もあったのかあ。知らなかったあ。教養のなさがすぐばれる。

何も志賀直哉に限らない。野坂昭如は志賀直哉よりはよく知っている。しかし、戦争童話『赤とんぼと油虫』？ 読んだことないなあ。有名な『火垂るの墓』だって、アニメを見ただけ。でも、あの小説は彼の直木賞受賞作だった。授業までに一応読んどかなくちや。

東山魁夷？ あのメルヘンチックな絵を描く日本画家でしょ。一応存じ上げてはいる。でも、展覧会に行ったことはないなあ。授業までにできるだけ絵を見ておかなくちや。学生に見せるために、コピーでいいから、絵を取り寄せよう。

金子光晴？ あの「エロ爺さん」のこと？ 第二次大戦中に彼がこんな反戦の詩を書いていたの？ ヘエーッ、知らなかった。

「精読」ではないが、四年生の卒業論文を指導していた時、ある学生から井上靖について書きたいと言われたことがある。井上靖なら出世作の『闘牛』から『あした来る人』『氷壁』は読んだことがあるぞ。任せてくれ、と思っていたら、同じ井上靖でも『西域小説』についてや

りたいと言う。中国のいわゆる西域を舞台にした小説だ。エッ、『敦煌』『蒼き狼』『楼蘭』……どれも名前だけは知っている。けど、読んだことはない。あわてて日本から取り寄せ、流し読みする羽目となった。

——というわけで、まさに汗顔の至りの毎日。でも、今後、何かの折に志賀直哉、野坂昭如、東山魁夷、金子光晴の話になったら、「ウー、彼はね……」と蘊蓄を傾けられるではないか。井上靖なら「彼の数多い作品のうちでも、西域小説はね……」と、蘊蓄の度合いを高められるではないか。

この年になって、遅ればせながら教養がついていくなんて、ほんとにありがたい。近々「尺八」の話が出てくるので、日本から尺八を持ち帰り、練習も始めた。教養の幅が、深くはならないけど、広がっていく一方である。

留学生業「落ちこぼれ」の言い訳

で、学ぶほうの留学生業のほうであるが、全く頭が痛い。ハルビンに来てすでに一年が過ぎたが、中国語のレベルは全然上がっていない。それどころか、日本にいた時よりも落ちている。いや、日本にいた時だって、初級のそのまた初級だったから、これ以上落ちようはないのだが、とにかく周りで話している中国語が未だにとんと分らない。

それはそれとして、中国語が上達しない言い訳① 週一〇時間とはいえ、日本語を教えるほうが結構忙しい。準備もあるし、さつきも書いたが、作文の添削に時間を取られる。おまけに、メールを送ってき



日本語の授業風景

た学生に「この表現は変だ」と添削していると、また時間が過ぎていく。頭の中で日本語の占めている時間が圧倒的に長い。

言い訳② ふだん周りにいるのは主に(1)日本語科の日本語べらべらの中国人老師、(2)日本語を勉強中の中国人学生、そして(3)日本人の同僚老師だから、中国語を使わなくても生活が出来てしまう。買い物もスーパーに行けば、黙っていても用がすむ。デパートでシャツを買ったり、やや複雑な買い物時は、学生なり誰かが手助けしてくれる。

言い訳③ 今、留学生としての中国語の授業は火水木に二時間ずつ、週に計六時間出ている。もっと出たいけど、日本語を教えるほうと重なって、これが限度だ。中国語の授業はもちろん初級で、クラスメートは日本人、韓国人、ロシア人の計十二人ほど。みんな僕より四十歳ほど若い。それはそれでいいのだが、彼ら、彼女らは毎週月曜から金曜まで、いや土日だって、中国語の勉強に費やせる。こちらはそうはいかない。そうすると、だんだん差がついてくる。落ちこぼれていく。士気も落ちていく。

と、くどくどと書いたが、要するに「やる気」の問題。老師業だけでなく留学生業も二年目となると、言い訳だけではすまない。でも、一年後の中国語の程度を想像すると、心もとなない限りではある。

「料理」に目覚める

お勉強の話はひとまず置き、ふだんの生活について言うと、住んで

いるのは、日本で言えばビジネスホテルのツインの部屋といった広さだろうか。ただし、風呂はなく、シャワーだけ。留学生たちと一緒に建物だ。留学生は炊事禁止だが、我々老師には専用の台所がある。共同の洗濯部屋もある。

もともと、他大学と比べると、わが大学の外国人老師の「住」はよくないそうで、大学側もそれは百も承知。で近々、三部屋もある新しい宿舎に移してくれる。ありがたいことだが、掃除も三倍になるなあ、とうれしさ半分ではある。

食べるほうは、ハルビンに来たころはもっぱら学生食堂を利用して。だが、学生食堂は世界どこでもそうだろうが、大変に安いかわり味はイマイチだ。それに、若者向けに作っているので、塩辛い。外のレストランに行けば、値もそうは高くないでおいしいのだが、今度はおかず一皿が三人分、四人分ある。ひとりではとても行けない。三〜四人で行き、おかずも三〜四皿取って突っつきあえばいいのだが、いつも誰かと連れ立ってというわけにもいかない。

それやこれやで、夕食は自炊することが多くなった。と言っても、生まれて初めてのカレー、生まれて初めての肉じゃが、生まれて初めての・・・失敗も多い。が、若いころ真面目だった人が、年とって突然なんとかに狂いだすように、「料理」にすっかり目覚めてしまった。中国語の勉強を中華料理の修業に切り替えようかと思うくらいである。あ、そのためには、やっぱり中国語が必要か。

自分探しの旅

来年の夏まではハルビン理工大学にいます、と先方と約束している。その後どうするか、まったく未定だ。同じ老師兼留学生業をやるなら、ちよいと目先を変えて内モンゴルへ行ってみようか、いや、中国最南端の海南島にしようか。それとも、このハルビンでカレー屋でも開業しようか・・・。

きざつぱく言えば、いま「自分探しの旅」の真つ最中なのかもしれない。いい年をして、ノータンキな話である。

(いわきはじめ・元朝日新聞企画委員、伊能プロジェクト事務局長)

*岩城さんは昨年から隔週で朝日新聞のイーターネットにコラムを書かれています。こちら是非ご覧下さい。



新春エッセー

新しいことを知る喜び

佐久間 達夫

去年(平成十四年)の十二月一日、佐原市内のF小学校の四年以上の児童と、その両親を対象に「伊能忠敬測量と日本地図作成の動機」というテーマで講演した。

講演内容をより確かなものにするために、拙著『伊能忠敬の測量日記』と、『伊能忠敬日記』を再読した。その時、日記を解読した当時のことが蘇り、しばしの間、思い出に耽った。

毎朝夕の勤務時間外に伊能忠敬記念館で、「日記」の一頁一頁を写真撮影し、それを写真館で現像焼付していただき、夜遅くまで『古文書辞典』と首つ引きで解読した毎日。タイプライターで、一字一字を印字した三年間。今では懐しい思い出として残っている。

「日記」に記してあった地名や人名を確認するために、休館日を利便して九十九里町や、東金市、多古町、光町、旭市、銚子市、千葉市、大栄町、千潟町、潮来市、竜ヶ崎町、伊奈町、川崎市、東京都など、一度ならず二度三度足を運んだ。又、全国各地の関係者へ手紙や電話で問い合わせもした。今考えると、「よくも失礼とも考えずに、こんなに歩いたり、書いたりしたものだなあ」と思う。

東京都港区高輪の「東海道大木戸跡」の石垣を眺め、「ここが忠敬の東海道、西国測量の基点であったのか」と、当時の測量の旅を推察したあの日。

多古町南中の平山藤右衛門家の墓地で、忠敬・ミチ夫妻と、盛右衛門・イネ夫妻の墓石を発見し、平山氏が、妹「タミ」や姪「ミチ」の親元として、嫁ぎ先への心遣いに感動したあの日。

忠敬の長男・景敬の継妻リテの生家、東金市宿の小川新兵衛家を訪問し、当主夫妻に、仏壇の中に大切に保管されていた歴代の遺牌を見せていただき、その後、小川家の墓地に行き、リテの母親「武津」の墓碑で、「婦人名武津。吉野氏。一之宮吉野源七姉。省義後妻。生一女二男。長子佐原嫁伊能氏」という刻字を発見したときの喜び。その日は、北風の吹いていた寒い日であったが、私の心は、春のように温かった。

忠敬の少青年時代に学んだ学問の内容を、「はい、そうであります」と、明治人の口調で話してくださり、その後、九十才という高齢にもかかわらず「日吉台」という高台にあった陸軍参謀本部陸地測量部が設置した「三等三角点」を案内してくれた忠敬の父の生家の分家、五右衛門家の十二代当主・神保光一氏の律儀な人柄に接したあの日。

平成元年三月、忠敬の家族で、未知の点の多い二番目の妻と、その子孫のことを聞きに、川崎市二子に住んでいる忠敬の二男敬慎(幼名秀蔵、後、神保玄次郎儀卿と改名の子孫宅を訪れた。子孫宅は、作家岡本かの子の文学碑が建立されている「二子公園」の近くで、前に多摩川が流れている所にあった。新築して間もない家で、当主の奥様から話を伺った。すると、「母は、平成元年一月十日の夜、食事の支度をしていたて食用油に火がつき、自宅が全焼してしまい、その時母も焼死してしまいました。明治十三年生まれなので、なくなった時は八十八才でした。母ならば先祖のこともわかったでしょうが」と、恐縮していた。敬慎の子孫宅の訪問は、その年の前年十二月に予定していたが、用

事ができて訪ねることができず三月にのびてしまった。そのため八十八の母からは、直接話を聞くことができなかった。

このことがあつてからは、一日がいかに大切であるかを痛感するようになった。

「測量日記」の解説が大部分終つた平成元年八月、「日記」のなかに、「伊能測量隊が測量の旅に出立する日、江戸深川の富岡八幡宮に参詣した」という記述があつたので、もしかすると、当時のことが八幡宮に記録として残っているのではないかと思ひ、佐原駅より電車に乗つた。途中、総武本線の「浅草橋駅」で下車し、鳥越神社脇の浅草橋三丁目の司天台跡を写真撮影し、バスで忠敬の深川門前仲町の隠居宅跡に回つた。

私が始めて隠居宅跡を訪ねたのは、昭和六十二年四月であつた。営団地下鉄東西線の「門前仲町駅」のホームから階段を上り、町中へ出たら隠居宅跡の方角がわからなくなつてしまつた。道路脇の店で忠敬宅跡の位置を聞くと「門前に、そんな屋敷跡があるのか」とか、「そんな標石は、見たことがない」という返事であつた。続いて二、三軒の店で聞いても同じ答えであつた。困惑しながら少し歩いて行くと、私の青春時代に美人で庶民から愛された「吉永小百合」と同姓の「吉永病院」の看板が見えた。この病院が、地図上の私の目印であつたので、そこを右折して、しばらく行き、又右折すると、そろばん塾の前に江東区教育委員会が設置した「伊能忠敬宅跡」の標石が立つていた。

話は元に戻るが、忠敬宅跡から富岡八幡宮へ行つた。社務所へ行き、来意を話すと、宮司さんは、「私も佐原には縁があるのです。八幡宮で所持していた江戸時代の文書類は、昭和二十年三月の東京大空襲で全部焼失してしまいました。当時のもので残っているのは「横綱力士碑」

だけになってしまいました。折角おいでになつたのですから、その碑を見て帰ってください」といい、「東京深川鎮座富岡八幡宮縁起」という八幡宮社務所発行の小冊子を譲ってくださいつた。

帰宅後、娘にこのことを話したら、娘の嫁ぎ先の叔父横井が、八幡宮宮司富岡興永氏と県立佐原中学校（現佐原高校）の同窓で、今でも親しくして貰つてゐるとのことである。

そして平成十三年十月に、この富岡八幡宮の境内に「伊能忠敬銅像」が建立され、翌年六月八日に伊能忠敬銅像記念講演会が八幡宮結婚式場で開催された。そのとき、伊能忠敬研究会事務局の配慮で私が、「伊能忠敬の江戸日記を読む」というテーマで講演させていただいた。

十五年程前に、私が尋ねた門前仲町の人は伊能忠敬の隠居宅跡を知らなかつたのに、この地に忠敬の銅像が建立されるとは、忠敬も驚いているであろう。又、「江戸日記」の文化四年八月十九日の条の「この午前、往来過分に付、永代橋崩れて大勢のもの横倒しに及べり」という記述が、八幡宮から譲つていただいた縁起にも記されていた。

忠敬が「日記」や「書状」によく記述していた「天命」という言葉が思い出され、「私と八幡宮は、細い糸で結ばれているのかな」とも思つた。

「伊能忠敬日記」の文政八年九月朔日の条に、「桑原兄弟（養純・周庵）が、工藤の縁家である加瀬の母に近づきになるため、銚子から太田（現千葉県旭市太田）の加瀬佐兵衛方へ行き宿泊した」という記述を見つけ、もしかしたら忠敬が高橋至時や桑原隆朝と近づきになった理由が解明できるのではないかと思ひ、忠敬の二女「篠」の嫁ぎ先である旭市太田の加瀬佐兵衛家の屋敷跡、墓地、菩提寺などを訪問した。三度の訪問にもかかわらず「工藤氏」のことを記した文書や墓碑は発見

できなかったが、墓地内で「篠」の墓石を見つけることができた。正面に「霜空妙融信女墓」、側面に「佐原邑、伊能氏女。加瀬稠卿之妻也。天明八年十一月九日終」と、刻字されていた。推察すると、この墓石は、佐兵衛家の先祖が、「篠」の死亡を知り、供養のために建立したものである。 (佐原市牧野観福寺の伊能家墓地内の「篠」の墓石に刻字されている戒名は「種鏡院霜空妙融大姉」)。

「日記」や「調査」についての思い出を記したが、一番大切なことが後になってしまった。

私が、伊能忠敬・忠誨日記の解説や忠敬に関する調査を第二の人生のライフワークとした理由は、伊能家十六代当主の故伊能敬氏の「伊能忠敬に関する史料や口伝を学究的なことに使用するならば、支援を惜しみません」という言葉であった。当時、伊能敬氏は、武蔵大学の教授として、御多忙な毎日を送られておられたが、筆者の調査には、親身になって御協力くださった。

又、忠敬関係の史料を保管している伊能洋・陽子ご夫妻には、貴重な史料のコピーを許していただいた。

伊能敬氏は、平成六年十一月三日に、それまでに執筆掲載した雑誌などを私に多数贈ってくださった。だが半年後の平成七年四月八日夜、家族に見守られながら天国へ旅立ってしまった。

忠敬は、「人間の一生で、いろいろなことに遭遇するのは、天命であり、先祖からの令徳によるものである」といつている。私が、伊能忠敬関係の調査ができたのも天命と思う。忠敬に関することは、不明な点が多すぎた。これからも引き続き解明してゆくつもりである。

「篠」の墓石 千葉県旭市太田・加瀬佐兵衛墓地

正面 霜空妙融信女墓

側面 佐原邑伊能氏女加瀬稠卿之妻也

天明八年戊申十一月九日終



伊能忠敬の測量技術

金窪 敏知

伊能忠敬の素養

伊能忠敬は、寛政七年（一七九五）五十才で江戸へ出て、浅草暦局の高橋至時の門下生となったが、彼が測量技術を身につけたのはその前半生の佐原時代であるといつてよい。

利根川下流域は毎年のように洪水に悩まされており、佐原村の大地主であり、名主であつた伊能家の主人には測量術を身につける者が多かった。神保家から婿養子に入つた忠敬に最も大きな影響を与えたのは、妻ミチの祖父伊能景利であつたといわれる。景利は、忠敬が入夫する三十六年前、一七二六年に五十八才で没しているが、洪水後の堤防の修築や土地の整理に関連して測量術の素養があつた。十七世紀末の元禄年間に幕府が国絵図の作成を行ったとき、景利は地頭所の命を受けて佐原全村の測量を行い、村絵図を作つて呈出している。また、近世初期の約百五十年間にわたる佐原村および近隣の村々に関する重要事項を書き記して、「部冊帳」と名付けるなど、諸種の記録の保存に心掛けることがあつた。忠敬が、後年詳細な測量日記を記録した背景には、景利から受けた刺激があつたことは否めない。

忠敬の蔵書には、万尾（まび）時春著「規矩分等集」、村井昌弘著「量地指南」、同「量地指南後編」、島田道恒著「規矩元法町見弁疑」など、当時の測量に関するものが揃つており、彼の測量術の基礎は佐原時代に培われたと言つてよい。

本稿は第二高等学校尚志同窓会月例の「二高尚志懇話会」で平成十四年四月十二日に神田学士会館で行つた講演の記録であり、会報「尚志」第76号所載の記事を、同会の承諾を得て転載するものである。なお、転載に当り内容の補訂を若干行つた。（金窪敏知）

忠敬が至時に学んだ天文暦学は「曆象考成」前後編で、入門一年で当時の最高知識を学べる段階に達した（「曆象考成」後編には惑星の運動に関するケプラーの第一・第二法則が記述されていた。第三法則は記述されておらず、至時は後にランデ暦書でこれを知ることになる）。また至時の指導の下で極めて根気よく、天体観測や、暦、日蝕、月蝕等に関する計算を行つたので、至時は忠敬のことを戯れに「推歩先生」と呼んだ。推歩とは日月五星の運行に関する計算のことである。至時が幕府の命で改暦に携わり、これに関連して地球の緯度一度の正確な距離を知る必要が生じたとき、その測定のために選んだのが「推歩先生」忠敬であつた。

伊能忠敬以前の日本地図

伊能忠敬の十七年間にわたる測量の成果である「大日本沿海輿地全図」が徳川幕府に上呈されたのは、彼の死後の文政四年（一八二一）のことであるが、これ以前にも幕府は数回日本総図を編纂している。すなわち、慶長図、正保図、元禄図などのいわゆる国絵図である。

徳川幕府は、慶長九年（一六〇四）つまり幕府成立の翌年に、諸国の主な大名らに各自の国絵図の調進を命じて、全国の国絵図を集めた。ついで、寛永十年（一六三三）にも全国に派遣した国廻り巡見使を通じて諸国の国絵図を集めた。これらの国絵図に基いて編集されたと

われる日本総図が「慶長図」と呼ばれるものである。

その後、正保元年（一六四四）および元禄十年（一六九七）に幕府は全国一斉に国絵図の改訂を行った。それぞれ「正保図」および「元禄図」と呼ばれている。元禄図の内容が出来ていなかったことから、享保年間にその改訂が行われた。幕府最後の国絵図改訂は天保六年（一八三五）であるが、このとき幕府は既に精度の高い伊能図を所持していたため、日本総図の編集は行われなかった。

「正保日本図」の編集者は大目付で兵学者の北条正房で、諸国から幕府に提出された国絵図を順次継ぎ合わせて集成したものであるという。

「元禄日本図」の編集者は寺社奉行井上正岑（まさみね）らで、縮尺四分一里（三十二万四千分一）で完成した。この図では国境筋の厳密な記載が要求され、隣国相互に食い違いがあれば合致するまで手直しが行われた。これは無用の境界論争を避けるとともに、境界に齟齬が無ければ絵図を順次に繋ぐことによって完全な日本総図が集成されるという発想が伴っていたとされる。しかし、陸続きでない本州、四国および九州相互の配置に問題があり、結果的に周防灘が膨れて、四国の位置が南に下がり過ぎたきこちない形となっている。

元禄日本図の欠陥を糾して「享保日本図」を編集したのが、最初が北条正房の実子である北条氏如（うじすけ）、後に建部賢弘（たけべ けんか）であった。北条氏如は隣接する国絵図を繋ぐ方法として、国境筋の接合に拘らず、隣国に高山など見通しのきく見当山を選び、遠望術（交会法）によって接合することを試みた。しかし、国絵図の内容を意識し過ぎたために作業が行き詰まる結果となった。これに対して、建部賢弘は交会法を用いるに当たって国絵図の内容を問題とせず、隣国の見当山の方角だけにより隣接する相互の国絵図を順次機械的に継

ぎ合わせることで、この方法を簡略化し、かつ地図の精度を上げることになった。このようにして出来上がった地図の縮尺は六分一里（二十一万六千分一）で、元禄日本図より一回り大きい。

建部賢弘は国絵図などの広域地図を作成するには、「遠望丈量」すなわち、交会法と道線法とだけでは不十分で、天測による緯度・経度の測定のことを明確に確認していた。しかしながら、彼の認識は理論の域に留まり、「享保日本図」では実地に応用されなかった。日本図を作成するのに実際に天測を応用したのは伊能忠敬が最初であった。

伊能忠敬の測量方法

伊能忠敬が日本図編集のために行った測量は、道線法と交会法を組合せた測地を基本とし、それに天測による緯度の測定を加味したものであった。この当時ヨーロッパでは三角測量が実用化していたが、我が国には導入されていなかった。道線法や交会法は従来から知られていた測量術であって、決して目新しいものではないが、忠敬は精巧な測量器具を開発するとともに綿密な測量を行い、また天測を行うことによって、地図の精度の向上に努めた。ただし、水準測量は行っていない。

〔道線法〕

伊能忠敬は全国の海岸線および主要な街道に沿って測量を行ったが、主として用いた方法は道線法である。道線法は、測量のルートを折れ線として曲がり角ごとに測点を選び、測点から測点までの方角と距離を次々に測りながら進んで行く方法である。彼は測定した数値をすべて野帳（のちよう）と呼ばれる帳面に記載して、図化は室内で行った。今日の平板測量のように、現地で直接図化するのとは異なっている。主

に使用した測量器具は、小方位盤（杖先羅針）、梵天（標尺）、間繩（距離尺）などである。屈曲の激しい海岸では舟を用い、間繩で距離を測定した。また、距離の測定に歩測を用いることもあった（因みに忠敬の歩幅は六十九センチであったとされる）。観測精度を上げるために、測点間の観測は前視だけでなく、後視を行うことによって方角の測定の誤りを防いでいる。複数の道線ルートを一環で繋いで環を作っていることも、位置の精度を高めるのに役立つている。

〔交会法〕

伊能忠敬は、測量のルートから見える範囲の目標物、特に離島や遠方の高山などの位置決定には交会法を用いた。交会法には、前方交会、側方交会、後方交会の三種類があるが、彼は主に前方交会法を用いたようである。これは、ある程度離れた二点以上の測点から、遠望できる同一の目標物を見通した方向線の交わりによって、その図上位置を決める方法である。交会法によって目標物に対する三つ以上の方向線が一点で交わらない場合（示誤三角形が生じる）は、観測に誤差があるか、誤測によるためであるので、測量の点検にも役立つ。

〔天測〕

伊能忠敬が測量を行った最初の目的は緯度一度の長さを測るためであった。このため彼は北極星を始め多くの星の観測を行い、緯度の算出に利用している。「大日本沿海実測全図」に添えて上呈された「大日本沿海実測録」には、約七千八百の地名が記載されているが、そのうち千百二十七ヶ所については緯度も同時に記載されている。道線法と交会法だけでは、相対的な位置が決められるだけであるが、建部賢弘が述べたように、天測を行うことによって伊能忠敬による地図は地球上における絶対位置が与えられた。緯度を地図（国絵図）上に表示したのは長久保赤水が最初であるが、伊能忠敬は実測図上に表示したの

である。彼は緯度一度の長さとして二十八里七町十二間（一〇〇・七五キロメートル）の値を得た。すなわち、地球の一象限弧長が九九六七キロメートルになる。この値は誤差マイナス〇・三パーセントである。

しかしながら、経度については「大日本沿海実測録」に記載がまったく無い。忠敬は、時を選んで、日蝕、月蝕、木星の衛星の蝕などの観測による経度の測定も試みたが、所要の成果を挙げることが出来なかった。先に師の至時は、寛政七年（一七九五）の英国航海暦を手して、その解説書である「暗又利亜（あんぐりあ）暦考」を著わすと共に、暦中に記載してある太陽の位置をもとに、春分時におけるイギリス（グリニジ）と江戸（浅草暦局）との時刻を比較して両者の経度差を算出し、その他各種の資料を参考にして、グリニジと京都（改暦御用所）との経度差を約九時〇三分と推定している。後に文政九年（一八二六）シーボルトが江戸参府の折に、携帯していたクロノメータによって測定した京都の経度は東経一三五度四〇分であった。なお、至時の子である渋川景佑が天保七年（一八三六）に完成した「新巧暦書」に従えば、京都の経度は九時〇三分四三秒Ⅱ東経一三五度五五分四五秒である。

伊能図の投影図法は、中国から伝わった「方格図」の流れを汲むもので、地球を球として扱っており、図に表示されている経度は、京都（改暦御用所）を通る子午線を原初子午線としてこれに「中度」と注記し、緯線上で経度一度の間隔が緯度余弦に従って狭くなるのに基いて各緯度に対応する経線の位置（中度からの隔たり）を計算して記入したものである。指導者であった高橋至時の早逝もあって、経度の測定、地図投影法の選択、地球を回転楕円体でなく球として取り扱うなど、伊能図には測地学上の問題が残されている。

〔測量器具〕

測量方法が従来と原理的に変わらないのに、伊能忠敬の測量精度が高かった理由の一つに、使用した測量器具の改良進歩があった。

距離測定用の間縄は通常六十間（約一〇九メートル）の長さで、一間ごとに目盛をつけてあるが、忠敬は間縄の延び縮みを少なくするため、麻、籐など、材料を工夫し、鉄鎖も用いた。結果として鯨のひれで作った間縄が最も良かったという。また、実用にはならなかったが、車輪の回転数で距離を測る「量程車」も試用している。

方位・方角の測定には、大・中・小の方位盤および半円方位盤を用いた。大・中方位盤には望遠鏡が付いていたが、大方位盤は運搬が困難であったので、中方位盤および半円方位盤を重用した。後者は半径五・五寸（約一八・二センチ）で対角線目盛が刻まれ、一度の十分の一まで読み取れるようになっていた。しかし、忠敬の測量で最も有効であったのは「彎窠（わんか）羅針」または「杖先羅針」と呼ばれた小方位盤であった。これは長さ一メートルほどの杖先に円形の小さな首振り羅針が付いていて、杖竿を地面に据えたと羅針が常に水平を保つようになっている。方位盤は十二支の逆目盛で、一支が三十等分つまり一度ごとの目盛が刻まれ、また、方位盤の縁には起こし立て式の覗き窓（視準器）が付けられており、簡単に方位が測れるようになっていた。

緯度の測定には、大・中・小の象限儀を用いた。恒星の高度を測定するもので、回転角を読み取る目盛盤のついた四半円と、これに沿って回転する望遠鏡からなっていた。現地に携行したのは中象限儀であった。通常、星の正中を観測するための子午線儀を用いて象限儀を正しく子午線上に設置し、恒星が子午線を横切るとき（望遠鏡の中心を横切るとき）の望遠鏡の角度を四半円の目盛で読み取った。観測誤差

を少なくするために数多くの恒星が観測された。

経度の観測に必要な時刻の測定には垂揺球儀という振り子時計を用いた。振り子が一往復することに一刻み進む文字盤があつて一〇〇万回まで表示でき、一日（八六四〇〇秒）に約五万九千回振動した。一〇〇万回は約十七日分である。観測には数日前から子午線儀や象限儀を据え、垂揺球儀を動かして太陽の正中時刻を起点として翌日の正中までの時間すなわち一太陽日の長さを垂揺球儀の目盛で知る。日蝕等の観測では、遠く離れた二点間、例えば江戸と大坂とで同時に、初虧・皆既・生光・復元などの時刻が直前の太陽正中時刻から数えて何回目を測定して、経度差を計算しようとしたのである。因みに忠敬が観測する機会のあつた日蝕は四回、月蝕は九回であったが、観測に成功したのは五回、測定値が使えたのは二回であったという。

いずれにせよ、忠敬は上述のような器具を駆使し、また、門人らを実務を通じて訓練し習熟度を重ねて、極めて能率的な測量を実施するのに成功したのである。

参考文献

伊能図に学ぶ、東京地学協会編、朝倉書店（一九九八）

第一章 伊能図に学ぶ視点（石山洋）

第二章 伊能忠敬の人間像（小島一仁）

第七章 日本測量史における伊能図

（a）国絵図と伊能図の測量術比較（川村博忠）

第八章 世界測量史における伊能図（金窪敏知）

伊能忠敬の地図を読む、渡辺一郎著、河出書房新社（二〇〇〇）

（かなくぼ としとも・元国土地理院長）

伊能古文書教室・佐原伊能家史料を読む

『家牒』

(四)

小島 一仁

昌雄、能・俳諧等を好む

正徳三(一七一三)年一二月、伊能景利は隠居し、嫡男の昌雄が七代目の家督をついだ。翌四年正月八日、昌雄は、地頭天方主馬の屋敷に年礼に出たが、そのとき、佐原村本宿組の名主を仰せつけられた。昌雄の名主在任中には、特にとり上げるべきほどのことはおこっていないが、ただ、次の二つのことについて記しておきたい。

一つは、文字の読み方についてである。伊能家では、これまで、毎年正月三日に、組中の「百姓・水呑・店借」に「粽飯振舞」をしてき

たが享保七(一七二二)年にはじめてこれを中止したとある。さて、「粽飯振舞」とはどう読むのであろうか。調べてみると、「粽」は「境」と同じで「椀」異体文字である。そして、「椀飯振舞」は「おおばんぶるまい」と読むことがわかった。私は、それまで、「大盤振舞」と書くのだとばかり思っていたので、「粽飯」の読み方を調べたときは、極めて印象深く心に残っている。

もう一つは、同じ年の一二月二四日、他からの出火で伊能家も類焼したことである。江戸時代、佐原村では火事が多く、四年前の享保三年にも大火があり、そのときにも、伊能家では、酒蔵・釜屋・麴室・湯殿・雪隠などが焼けたが、幸に、居宅は類焼をまぬがれた。ところが今度の火事では居宅まで焼けてしまったのである。しかし、翌年春から普請にとりかかり、夏までには出来上がったという。

享保一五(一七三〇)年一月、昌雄は「病身につき」という理由で地頭所に願って名主役を退いた。しかし、能や俳諧などを好み、地頭所をはじめとして、他の旗本の屋敷にも出入するようになった。

昌雄は、能・俳諧等を好む。正徳三(一七一三)年一二月、伊能景利は隠居し、嫡男の昌雄が七代目の家督をついだ。翌四年正月八日、昌雄は、地頭天方主馬の屋敷に年礼に出たが、そのとき、佐原村本宿組の名主を仰せつけられた。昌雄の名主在任中には、特にとり上げるべきほどのことはおこっていないが、ただ、次の二つのことについて記しておきたい。

一つは、文字の読み方についてである。伊能家では、これまで、毎年正月三日に、組中の「百姓・水呑・店借」に「粽飯振舞」をしてき

同年四月八日於駿河台御屋敷御興行是は三郎右衛門正月罷登候節、大沢専右衛門殿へ段々御影を以度々御囃子又は御能等被仰付殊ニ御茶迄頂戴仕候ニ付、為冥加御能被遊候様願申度尤入用之儀は私方ニて相勤可申旨相願候所、三月下旬御興行可被遊候由被仰付、四月四日当地発足五日江戸着六日御屋敷へ罷出候所八日昼御興行相極候、其節も御相手被仰付首尾能相勤候

○解説文

其以後三郎右衛門御地頭所江度々罷出、駿河台御屋敷御囃子御能御興行御本家青山伯著守様御使番様方御馳走御囃子又は渡辺内記様同惣右衛門様等ニて御能有之候節、殿様主君若殿様次君兵八郎様御相手被仰付笛相勤拝領物頂戴ス

依之青山備後守様浅野内膳様橋本勘七様渡辺内記様同惣右衛門様大久保形部様諏訪頼負様大島久左衛門様小菅八左衛門様久永修理様園部庄九郎様松岡藤七郎様野村新三郎様中条伊織様野口幸次郎様等へも度々御能御囃子之節致出候

(享保一九)

同年四月八日於駿河台御屋敷御興行是は三郎右衛門正月罷登候節、大沢専右衛門殿へ段々御影を以度々御囃子又は御能等被仰付殊ニ御茶迄頂戴仕候ニ付、為冥加御能被遊候様願申度尤入用之儀は私方ニて相勤可申旨相願候所、三月下旬御興行可被遊候由被仰付、四月四日当地発足五日江戸着六日御屋敷へ罷出候所八日昼御興行相極候、其節も御相手被仰付首尾能相勤候

また、昌雄の生活・性格は、『旌門金鏡類録』所収の「伊能家系年譜」には、次のように記されている。

……江戸ニ出テ能囃子ニテ地頭青山嫡子同嫡孫同ハ勿論御旗本方ノ相手トナリ、常ニ接見シ茶道ヲ以テ高貴ノ家ニ到リ、又俳諧ニテハ関水素風等ト相交レリ寛政十一年地頭青山家ヨリ能囃子ノアリシ節ハ相手ニ致サレ種々贈りモノアリ或ル時ハ贈ニテ手自筆被下置者マデ後都下に隠宅ヲトシ好ノ道ヲ以テ列士ノ際ニ接シ商估ノ利ヲ不好……

昌雄は、父の景利とちがつて、芸事を好み、村務や家業には、あまり熱心ではなかったようである。名主役をやめたとき、嫡男の景慶はまだ十四歳であったので「補佐」をつけて家をまかせ、自分は江戸に隠宅をかまえてくらすようになったのである。

不幸つづきの伊能家

昌雄は、なるべく早く景慶に正式に家督を譲りたいと思っていたがもともと病身であった景慶は元文元（一七三六）年二〇歳という若さで死去してしまった。昌雄は、ほかに子がなかったので末弟の長由にあとをつがせることにした。長由は、一たん江戸の商家の養子になっていたのだが、のちに離縁独立して、江戸小網町で「地廻り米穀並に酒問屋」を開いていた。その長由を佐原へ呼びもどしたのである。長由は家督をつぐと共に、佐原村本宿組の名主をつとめ、後には名主後見として、村役人の上に立って村務の監督にあたった。ところが、長由も、寛保二（一七四二）年、昌雄に先立って、亡くなってしまった。

(A)

嫡男伊能徳右衛門景慶

初名喜四郎
享保十九年五月五日死ス
昌雄遺命ニ景慶を此家一代主と爲ス
事ニ違ハズ公認ナリ

但徳右衛門儀未幼雅(稚)より水戸御役者半井源八稽古ニ而森田流

之笛を吹き大小鼓も能打又神教を香取大宮司和雄ニ受神道伝授を

享保十七子年六月六日笛之家森田庄兵衛門第二成同廿一日翁伝授

○解説文

嫡男伊能徳右衛門景慶

初名喜四郎
源六

法号実相院徹心本阿居士
享保廿一歳年五月五日死ス
昌雄遺命ニ景慶を此家一代ニ立候間
未之迄其心得可有之旨有之

但徳右衛門儀未幼雅(稚)より水戸御役者半井源八稽古ニ而森田流

之笛を吹き大小鼓も能打又神教を香取大宮司和雄ニ受神道伝授を

享保十七子年六月六日笛之家森田庄兵衛門第二成同廿一日翁伝授

(B)

八代目伊能徳右衛門景慶

称徳右衛門

法号 實相院徹心本阿居士

享保二十一年五月五日死ス

昌雄子母同氏權之丞景胤女

享保十九年七月五日死ス年十七歳
胤又胤長子本左門景ノ弟分家

基無子ヨリテ二人女村人成男 幼ヨリ樂府ヲ好ミ笛ヲ善セリ

權之丞又胤長子分家其後其後胤長子 能興行 幼ヨリ地頭所ニ在リ

遊アル志アルヨリ早ノ景慶ニ水事ヲ視ルハ景慶年少

シトイヘモ家名ヲ不失溫和ニシテ恵ヲ好ミ能ク窮民ヲ憐

人ヲ愛シ村里其ノ敬慕ニ服ム不ヤニシテ病ヲ起テ父昌

雄江戸アリ召ヒテ病ヲ療ム遂ニ不起江戸本所御墓所町

父ノ旅宿ニ死ス年二十一

(A)と(B)の筆跡がちがうことは、一目見ただけでわかるであ
ろう。(A)のほうは、江戸時代に記されたものであるが、誰の筆によ
るものなのかはわからない。だが、(B)の方は前にも記したように、
一五代目康之助の室・多嘉が、姑のこうの指示によって記したもので
あることはまちがいない。

こうは、昭和十一年(一九三六)七月に、夫の一四代目景徳に先立
たれたが、それ以後は、忠敬の遺品をまもることを生き甲斐にしてい
たようで、戦前から戦後にかけて、忠敬旧宅に於て参観者のために地
図をひろげて懇切な説明をしてくれたものである。私も、終戦の翌年
戦場から帰還して後、しばしばこうの説明を聞き、また、時には文書
の読み方を教えてもらったこともある。

また、多嘉が一五代康之助に嫁して伊能家の人となつたのは、大正
一〇年(一九二二)、数え年二〇歳のときであった。彼女は生家が鹿兒
島藩の史学者であつた伊地知家であつたことや、こうの薫陶をうけた
こともあつて、若い頃から忠敬の事績や伊能家の歴史に深い関心をも
つていたようである。そして、姑のこうが昭和二十九年(一九五四)数
え年八八才で死去すると、その遺志をついで、忠敬遺品の保存と伊能
家史料の整理のために力をつくしたのである。



用語の知識

月距法とはー時計を必要としない経度測定法ー

土肥 規男

ここに紹介する月距法(げつきよほう)という測定技術は航海の世界では古くから着想されていたもので、月と太陽、又は星との角距離を測り経度を計算により求めるものである。この技術がほとんど知られていないのは、月距法が実用の域に完成した頃、時を同じくしてクロノメーターも完成したことによる。時計がまだ高価で信頼性に乏しかった一時期使われたと思われるものの一八二五年英海軍が一艦一個のクロノメーターの搭載を定めた頃から、一層補助的役割になり衰退して行った。

私は「伊能ウォーク」を歩きながら、天文観測や緯度一度の長さの測定に強い関心を持った忠敬が経度の測定にも関心を持たないはずは無いと考えていた。そんな折の二〇〇〇年七月、日本国際地図学会定期大会が開催され東大横山教授の特別講演で月距法なる経度測定法を始めて耳にし、この答えが得られるのではないかと期待した。このことを当時海上保安大学校にいた菊池眞一氏に話したところ、氏も始めて聞く用語であり、同僚の航海学講座を担当している西野教授から、飯田氏の論文を紹介され送ってくれた。

論文は 月距法 (太陰距離法) Lunar Distance

著者 飯田嘉郎 航海22号(昭和40年9月)

しかし経度の測定精度が熟達者でも三〇分(約50キロメートル)程度と低く、技術の完成が伊能の活動時代と時間的に合っているものの地図作りには利用できないことが確認できて終わった。

日本での月距法による経度測定は、シーボルトが京都で(金窪)、英国測量船が長崎の無人島で(横山)行ったことを耳にした。

飯田論文の概要(序から)

我々が初めて海に出た頃、金科玉条にしていた修正差法の一時代前、月距法なる経度測定法があり時計を必要としなかった。海上における経度の決定は、緯度と違って困難であり、十八世紀の後半になってやっと可能になったものである。

測定法は(一九〇四年乗船時の回顧のなかで)土官二名と船長が六分儀を持ってブリッジに立ち、もう一人の助手がクロノメーターを読み記録をとる。「測れ」の合図で船長は大きな六分儀で月のはっきりしている縁と太陽又は星までの角距離を測る。他の二名は月ともう一つの天体の水平線からの高度を測る。それをクロノメーターの時間に合わせて記録するというものである。

月距を測り、その修正計算によって直ぐ経度が求められるものでなく、航海暦から、その月距になるべきグリニッチ時が求められる。次にその時刻をもとにして、天文のデータを得、その地における天体時角を計算する。航海暦に載っているグリニッチにおける時角を比較して経度を知ることが出来た。

月距法が花と咲いた期間はクックの最初の航海から約50年ほどであった。

序の後、算法、一五世紀までの月距法、一六世紀の月距法、バツフィンの月距法、一七世紀の経度測定法の探求、海上における経度測定法の発見、測角器、結語と章立てされ、月距法の発達から消滅に至る歴史が詳しく記述されています。また結語の後半に日本で月距法が教えられたかどうか述べている。徳川幕府の長崎海軍伝習所の開設は安政二年(一八五五)であるが、すでに月距法の没落の始まる頃であり、速成教育の実態から否定的見解を述べている。

(どいただお・日本デジタル道路地図協会専務理事、

元国土地理院参事官)

芳名録より

——佐原伊能家を訪れた人々——

即 菩 提
 月 煩 惱 乃
 英 治

昭和十八年六月廿二日 伊能忠敬

吉川英治

即 菩 薩
月 煩 惱 乃
英 治

英 治

よしかわ えいじ (一八九二—一九六二)

小説家。本名英次(ひでつぐ)。神奈川県生まれ。小学校中退後、種々の職業に従事。物語の魅力と求道精神で多くの読者を集めた。作「鳴門秘帖」「宮本武蔵」「新平家物語」など。文化勲章。

(広辞苑)

芳名録の署名は、慎ましやかな右の年月日と二行のみ。何か物足りなさを感じていたところ、従兄弟の藤岡健夫氏から、手元に吉川英治の色紙があると聞いた。早速コピーの提供を受けて、ご披露することができた。例によつて祖母が芳名録を差し出し、その上色紙にも揮毫をと、お願いしたのではないだろうか。そして後日、その色紙が藤岡家の所蔵となったのは、二代続いての伊能家との縁戚関係からすれば、自然な事であろう。同時にお書き頂いたものが、離れ離れに保存されていたのである。

―芳名録こぼれ話―

伊能 陽子

第十六号から「芳名録より」という頁を受け持つて、現在まで十五人の方々の墨跡を紹介してきた。大正六年から昭和三年までの間に佐原へおいで下さった各界の名士のご署名は、その時代を反映している興味深いものがある。

揮毫をお願いしたのは、佐原の旧宅で忠敬の遺品を守り続けた祖母孝（こう）である。祖母は慶応三年生まれ、八八才で亡くなるまで毎日のように見える見学者に、地図を広げ測量器具を並べて丁寧に解説することを天職としていたという。五姉妹の長女が孝で、次女ます（藤岡）三女りつ（須賀田）四女かつ（猿田）五女えむ（桧垣）と、さぞ賑やかであったことだろう。祖母八八才のお祝いの写真には、セピア色の中に四人のおばあさまが、見事に並んでいる。

桃の節句が近づく記念館に飾られるお雛様は、このおばあさま方のものである。雛道具の箱の中には、手作りの小さな手習い帖や、人形の着物などが残されている。姉妹がお雛様を飾り、人形遊びをしている風景をあの旧宅に重ねると、ほのぼのとしてくる。

芳名録にはご署名だけの方も多いが、句、和歌、漢詩など、あるいは絵もお書きくださった方が、かなり沢山いらつしやる。それぞれ個性豊かで、深い教養がしのばれた感嘆するのみである。

ただし大変困ったことにあまりに達筆すぎて、私には判読できない箇所が沢山あるのだ。お名前が読めなくてはコメントの書きようもなぐため息をつきながら、さきのばしになっている頁が増えて来た。そこで皆様のお知恵拝借。不明の箇所があってもそのまま掲載し、解説された方に「こー報いただいて、次号で」披露するのは如何でしょうか。是非ご協力のほどを。



ありし日の伊能孝（こう）さん・佐原旧宅にて



縁側で量程車を説明



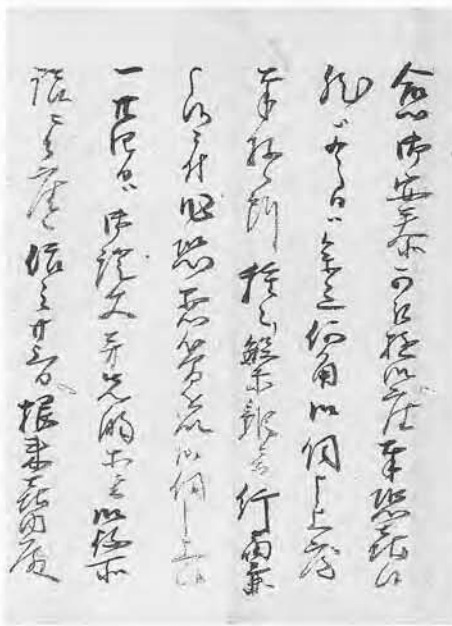
少年・少女に忠敬の夢を伝える

高橋景保の登場

安藤 由紀子

伊能忠敬にとって文化元年が、運命を大きく変える年であったことは、以前述べておいた。

一月に師高橋至時が亡くなって、四月にその子景保が天文方に任ぜられた。十月間重富が、補佐のため、大坂から江戸に入って、伊能測量の指揮官はこの二人に任される事になった。間は五年後の文化六年、役目を終えて帰坂した。それから後は最後まで景保と忠敬の間で、指揮官と現場リーダーのやりとりが行われ、伊能測量が進行していった。



新史料の発見

筆者はこの夏、佐渡にお住まいの郷土史家本間寅雄氏から三通の書簡のコピーを送っていただいた。そのなかの一通は、景保宛の忠敬の書簡で、今まで見たことのないものであった。これらの書簡は、旧本陣のお家柄で、現在「佐渡郷土文化」編集主幹の山本修巳氏の所蔵になるものであった。本間氏のお口ききで、直接山本氏のご承諾を得たので、景保と忠敬の長い、面白いお付き合いの一コマとして、ここでその全文をご紹介します。

伊能忠敬書簡 高橋景保宛

文化五年 山本修巳氏蔵
正月廿一日

愈御安泰可被遊御座、奉狂喜候

然ハ今日ハ参上、何角御伺申上度

奉存候所、種々繁雜ニて行届兼

申候ニ付、乍恐愚簡を以御伺申上候

一 廿四日ハ御証文并先触等ニて、御役所

詰ニ御座候 依之廿三日、根来喜内殿

并組頭衆へ罷出可申奉存候 其外

津田御屋敷等へ立寄申候

次上下二て可立寄
存候 御尋申上候

一 堀田摂津守様へ、今度も罷出候儀と

奉存候 相定候儀ニ御座候間、名札斗

持参仕り、四国測量出立之儀ハ、口上ニて

申上候ても宜御座候哉 又四国出立之儀

書入候儀ニ御座候ハ、御下書被下置候様ニ

奉頼上候 明廿二日、麻上下二て

[illegible]

5/19/97

高橋亨君

呼能即符往

罷出可申奉存候二付、御伺申上候
夫より御役所へ相回、可得尊意と
奉存候 頓首

正月廿一日

伊能勘解由

高橋尊君

尊下

二人は丁度四十歳の差があるから、この手紙の書かれた文化五年には、忠敬六十四歳、景保二十四歳である。

四日後の四国測量出發をひかえて、忠敬は挨拶回りで忙しい。士分に取立てられてまだ間がないので、武士社会のしきたりに慣れていない。挨拶のときの服装やそのやり方についての質問状である。特に伊能測量のバトロン、若年寄堀田摂津守に対しては、玄関で名札を置き、出てきた人に口上を述べるだけでいいのか、書き物を渡したほうがいいのかわからない。明日麻上下で伺うので、書くべきならば下書きを書いてほしいと頼んでいる。

高橋景保は俊才であつた。後に述べるように、忠敬もその才は認めていたようだが、父至時先生と比べて性格に高慢なところがあり、常々忠告してきたし、苦々しくも思つていた。名主として長年人をまとめる苦勞を味わつてきた百鍊琢磨の老人が、孫ほど年の違ふ指揮官に、新米の士分としてこういう手紙を書かねばならぬことに、この時代の人間關係の皮肉が感じられて面白い。

高橋景保の少年時代

景保は天明五年、二男三女の長男として大坂に生まれた。幼い時から聡明であつたらしいが、幼・少年時代の記録はほとんどない。幼名を作助といい、父の跡を継いでから作左衛門景保と名乗った。

二歳年下の弟は、幼名善助、後に忠敬の測量を手伝い、天文方の名門渋川家の養子となり渋川景祐と名乗った。明治五年まで使われた暦を作った、これまた天文方の大物である。

父至時が寛政七年、鉄砲組同心から一躍天文方に任じられ江戸へ出て間もなく、景保は十一歳で母を失った。至時は公務多忙で、妻の葬儀にも帰国を許されず、子供たちもすぐには引き取れなかったため、母親の実家青木氏が面倒を見ていた。

作助は長男として父の代わりに一人前に家を守っていたらしく、寛政八年五月の至時宛麻田剛立先生の書簡に「去る五日作助様お出でくだされ、例のことながらお着代一封くだされ大変ありがたく存じます。……作助様には例の通りお酌いたし、お酒差上げました。……ご壮健とのお話でございました。ご心配はご無用と存じます」とある。作助、時に十二歳であつた。

子供たち五人が江戸へ引き取られたのは、何時の事だろうか。改暦御用のため上京していた至時が、仕事を終えて江戸に帰る翌九年末に同行したのではないかと上原久氏は推測しておられる。

すると忠敬と景保の出会いが寛政九年末と想像できる。忠敬は毎日のように司天台に通つて至時の教えを受けていたであらうし、景保もまた、弟善助と共に、至時の熱心な教育の相手だったと思われる。天文方もまた世襲であつたからである。したがつて忠敬と景保・景祐は至時の同門の弟子といえる。景保十三歳、景祐十一歳、忠敬五十三歳

であつた。

景保は数学・天文学はもとより、当然蘭学の勉強もしたのであろう。

父は蘭語ができず大変苦勞し、当時の新しい学問にとつて、蘭語は必要不可欠のものであることを痛感していたであらうから、史料はないが、誰かから蘭学を学ばせていたと考えられる。もともと景保には語学の才があつたものと見え、後年満州語の辞典を作り、満州語で書かれたロシアの国書を幕府のために翻訳した経験もある。

又出府後昌平黌に学んで、漢学にも磨きかけた。「天文方代々記」は、次のような彼の受賞を伝えている。

「天文方代々記」

頁五十八 a

享和元辛酉年十一月部屋住にて、学問所において素読御吟味に出席のところ、同年十二月十九日素読出精に付、拝領物仰せ付けられる旨、堀田摂津守殿より仰せ渡され、同所において、林大学頭御目付け松平伊織・土屋帯刀より申渡し、丹後島二反頂戴仕る

時に景保十七歳であつた。彼が後に若年寄堀田摂津守正教から絶大な信任を得るにいたるには、右のようなきつかけもあつたのである。

十九歳になって、弟の景祐と共にもう天測も任されていたようである。間重富宛父至時の書簡は、次のように伝えている。

高橋至時書簡

間重富宛

星学手簡 五十四

享和三年閏正月二十九日

(前略) 去冬の火星退衝も測りました。この節の土星・木星の退衝

も今測量中です。幸いせがれは、測量がすきなようで、子午線の測も大差ない程に測れるようになりましたので、名代としても測らせております。せがれ兩人、下役等を相手にして、夜半まで退衝を測っております。(後略)

天文方就任

翌文化元年二十歳のとき、父の死の後を受けて景保は天文方に任命された。

十月間重富が出府して補佐の任に当り、事務的な事は勿論、学問的にも天文・暦学に止まらず、数学から物理学に及ぶ指導を行った。重富の持っていたいっさいの学問や技術が景保に伝授された。重富は五年を費やして、景保教育の大任を果たし帰坂したのである。したがって景保の学問は、当時として最高の域に達していたであろうことは、いうまでもない。

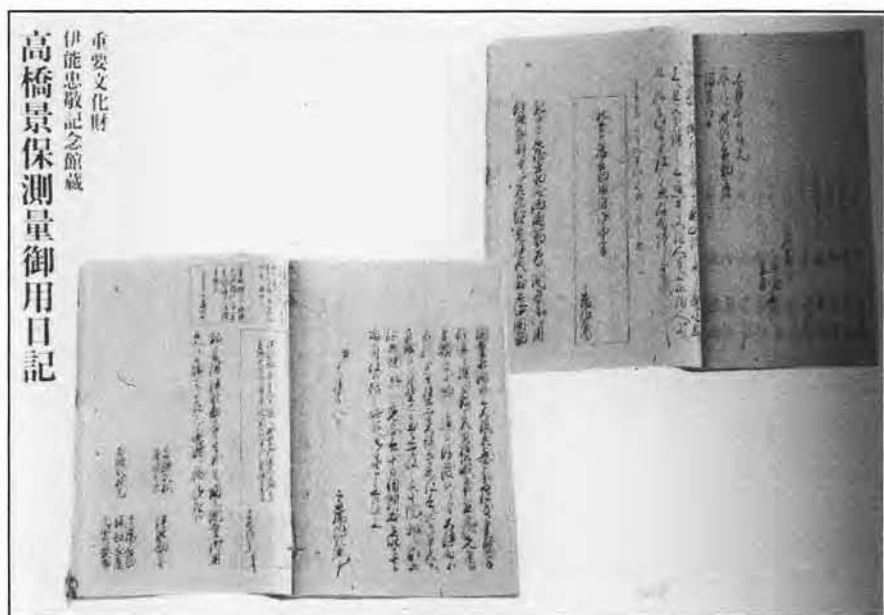
伊能忠敬は同じ文化元年士分に取立てられ、身分上測量に支障がなくなつた。第五次の測量を前に、彼も当代一流の測量家になっていた。こうして文化二年、第五次測量は、幕府事業として、幕臣忠敬により着実に遂行されるに至り、景保は測量の最高指揮官として、その円滑な進行の要となつたのである。

参考文献

上原久 「高橋景保の研究」
「天文方代々記」・「星学手簡」

講談社

* 山本修巳氏所蔵、新史料発見の記事を次頁でご紹介いたします。



伊能忠敬直筆見つかる

江戸期 学者にあてた手紙

佐渡・真野町
山本さん方

国内初の実測地図を完成させた伊能忠敬（1745-1818）が、江戸期の天文学や西洋暦研究の要となった学者三人の直筆の手紙が、真野町新町の山本修巳さん（64）の方で見つかった。三通とも同僚の学者にあてたもので、当時の学

る貴重な発見だという。手紙は三通を張り付けて長さ約2・5びの巻物にしてある。最初は伊能が1808年に書いたもので、四国への測量旅行に際し、幕府の天文奉行にあいさつ回り先や、服装などのことを書いている。

2枚目は天文学者麻田剛立（1734-1799）が、伊能の西洋暦の師にあてた私信。3枚目は伊能の全国測量を支援していた8月中旬、「伊能忠敬」などと言われた巻物に気づき、知人を通じて伊能敬研研究会のメンバーに調べてもらい、本物のお墨付きを得たという。

剛立（1734-1799）が、伊能の西洋暦の師にあてた私信。3枚目は伊能の全国測量を支援していた8月中旬、「伊能忠敬」などと言われた巻物に気づき、知人を通じて伊能敬研研究会のメンバーに調べてもらい、本物のお墨付きを得たという。



伊能忠敬らの手紙を見る山本修巳さん＝真野町新町で

山本さんは「恐らく曾祖父ぐらいの代から収集していたもの（一部）だ。伊能が江戸の天文関係者に目的を絞って集めたのではないかと推測している。山本さん方は佐渡奉行の本陣ともなった旧家で、代々、数多くの歴史的資料を収集してきたことで知られている。

伊能忠敬直筆見つかる 江戸期 学者にあてた手紙

「02年10月2日朝日新聞新潟版記事から・本間寅雄氏より」

国内初の実測地図を完成させた伊能忠敬ら、江戸期の天文学や西洋暦研究の要となった学者三人の直筆の手紙が、真野町新町の山本修巳さん方で見つかった。三通とも同僚の学者にあてたもので、当時の学者グループの仕事ぶりがうかがえる貴重な発見だという。

手紙は三通を張り付けて長さ約2・5びの巻物にしてある。最初は伊能が1808年に書いたもの。四国への測量旅行に際し、幕府の天文筆頭にあてたあいさつ回り先や、服装などのことを書いている。

二枚目は天文学者麻田剛立（1734-1799）が、伊能の西洋暦の師にあてた私信。三枚目は伊能の全国測量を支援した天文観測家間確斎（1786-1838）が、同僚にあてたもので「月食を観測することになっていたが、雲が厚くて観測は失敗した。翌々日は天気晴れたのに」などという内容だ。

県立佐渡高非常勤講師の山本さんによると、父の十年忌後に書庫を整理していた8月中旬、「伊能忠敬」などと書かれた巻物に気づき、知人を通じて伊能忠敬研究会のメンバーに調べてもらい、本物のお墨付きを得たという。

山本さんは「恐らく曾祖父ぐらいの代から収集していたものの一部だろう。伊能が江戸の天文暦関係者に目的を絞って集めたのではないかと推測している。

山本さん方は佐渡奉行の本陣ともなった旧家で、代々、数多くの歴史的資料を収集してきたことで知られている。

蝦夷地での伊能忠敬の先触等

幕府直轄直後の宿駅制における

堀江 敏夫

はしがき

伊能忠敬は蝦夷地測量のため寛政一二年（一八〇〇）閏四月一九日（新暦六月一日）に江戸を出立し、一〇月二日（新暦十二月七日）に帰着した。幕府の派遣期間は一八〇日であった。

蝦夷地では、伊能は三通の先触を発し、箱館御番所の支配勘定・御勘定から二通の添触が出されていた。その外紛失物の順達書、書状の送付、受領があり、この期の旅日記、記録類に先触などを記すものがないだけに、伊能の測量日記（蝦夷于役志）は当時の蝦夷地での宿駅制を知るうえで極めて貴重なものである。

当時の蝦夷地の様子

寛政四年（一七九二）ロシア船が根室に来て、アダム・ラックスマンは女帝カテリーナ二世の国書を持参し、日本人光太夫外三人の返還をたてに国交を申し入れた。同八年（一七九六）イギリス船が絵鞆（現室蘭港）に入港、薪水補給と水深調査を行い、この間乗組員（ハンス・オルソン）が急死したため、絵鞆の先にある大黒島に埋葬し、オルソン島と名付ける事件が起こった。

幕府は北辺での海防の重大性を痛感し、寛政一一年（一七九九）一月浦河以東を、八月には知内・浦河間を上知し、太平洋岸の東蝦夷地全体を直轄地とし、松平信濃守忠明をはじめ、勘定奉行石川左近将監、

目付羽太庄左衛門、使番大河内伝兵衛、吟味役三橋藤右衛門を蝦夷地取締御用掛に任じ、松平らの推挙により七〇余人の幕吏を江戸靈巖島蝦夷会所、東蝦夷地の各地に派遣し、警備を強化した。これまでの場所請負制度を廃止し、請負人を罷免したが、場所に所属した支配人・通詞・番人などは従前そのまま雇用し、交易所だった運上屋を会所と改め、幕吏の監督のもと直接経営を行なうことになった。また、津軽藩には砂原以東、南部藩には浦河以東の警備を命じた。

蝦夷地は海上交通を主としてきたが、帆船は風向き、潮流、濃霧などの自然条件に左右され、警備には実用的ではなかったから、早馬、早走りを送り、警備兵、その荷物を運ぶためにも馬の利用できる道が必要であった。幕府は陸上交通に力を入れることになり、道路開削、旅宿開設、駅馬の制を設けることにし、本州で長い年月をかけてつくり上げてきた宿駅制をそのまま蝦夷地に当てはめた。しかし、当時村制が確立していたのは山越内までで、それ以东は出稼ぎの和人とアイヌコタンがあるだけであったから、会所で宿場業務を行い、人足にアイヌを当てるものであった。

伊能忠敬が蝦夷地測量に来た時は、どうか東蝦夷地の宿駅が整いはじめた頃であったが、まだまだ不十分であった。また、会所から会所までの距離があり、途中の番屋が宿となり、二日・三日も継ぎ立てがなく、人足も馬も一緒に泊まっていた。

蝦夷地での添触と先触について

寛政一二年（一八〇〇）五月一九日に松前領吉岡村に上陸した伊能は、ここから陸路をとり、人馬を雇い、三泊して二二日（新暦七月一日）に箱館に到着した。宿の地蔵町伊藤屋に帰着後、直ちに箱館御

番所を訪れ、蝦夷地入りの届けを出し、御勘定水越源兵衛、支配勘定寺田忠右衛門（両名は添触発行者）、御普請役小林新五郎（添触担当者）などに挨拶し、江戸からの添触を小林に返した。亀田役所（旧松前藩亀田奉行所）は箱館に新役所が出来るまで本部としたところで、蝦夷地取締御用掛の箱館勤務者である三橋藤右衛門などがあり、伊能は文書で到着届を出した。二六日に箱館御番所に添触の発行を願ひ出ているが、蝦夷地内での添触は箱館御番所において発行していた。

五月二八日土用、好天気となり、伊能は箱館山に登り、方位を測った。その後、箱館御番所へ行き、出立届、先触を提出して、添触を受け取った。馬が一疋となり、大方位盤は箱館に残した。

覚（御添触の写し）

一、馬 壹疋

一、人足 三人

右者此度蝦夷地為御用、津田山城守領分下総国佐原村元百姓当時浪人伊能勘解由其他江被差遣候間、書面之人馬同人申談次第、相定之賃錢請取之、無遅滞可差出之、渡海川越止宿等之儀、是又差支無之様、且一ヶ所に三、四、五宛逗留之儀も可有之間、其心得に而執斗可申候、以上。

申五月 箱館御番所

御印

箱館よりクナシリ迄

右村々場所々々 名主 支配人

先 触 從箱館クナシリ迄

伊能勘解由

一、馬 壹疋

一、人足 三人

右者我等儀、蝦夷地測量就御用上下五人明二十九日箱館出立、クナシリ迄迄罷越候間、書面之人馬御定之賃錢請取之、聊無遅滞差出、繼立渡海川越止宿等之儀、是又差支無之様、且壹ヶ所に三、四、五日迄逗留之儀茂可有之候。尤天氣次第村々場所々々に而日限延引も有之候間、アツケシ、クナシリ迄迄は行届申間敷候間、其心得に而執斗可給候、以上。

申五月廿八日

伊能勘解由

箱館よりクナシリ迄

右村々場所々々名主支配人中

箱館村役人より先触の奥江添触

一、伊能勘解由様御先触の通、村々宿々無遅滞繼立可被申候、尤村々において御逗留有之筈に、右先触御着被成候上にて、先々へ繼送り可申候、已上。

箱館月番 矢川四郎左衛門 印

長谷川太左衛門 印

申五月廿八日

大野村始久奈志利迄

（蝦夷于役志）

これらが当時の公用旅行者の三点セットで、本人の先触、役所の添触（御証文）、村役人（支配人）から各宿への添触であった。また、宿泊日を知らせる順達書も先触に添えて提出されたが、天候によって測量日程に変更が生じるので、箱館月番の添触に逗留がある筈なので、先触が到着した上で先に継ぎ送りするようにとあり、先触を留め置き、伊能に次の日程を伺った上で継ぎ送りされていた。

蝦夷地での人足賃はアイヌ撫育から「人足其外召使候節、前々通、五里以上は七合五勺、十里以上は壹升相渡候積に候事」と米にて手当てとした(注1)。アイヌが濁酒を作るため米を好んだので、旅人はこの米代金を会所支配人に払い、アイヌには会所から米又は酒で渡された。人足賃が鉄銭になったのは享和三年(一八〇二)で、人足一人一里二〇文(馬一疋一里四〇文)で、山道は二割増しとなった。大川での渡船はアイヌの渡守がいて官給を受けていたので、公用者は無料、一般(出稼人)は一人二文をとる所もあった。宿泊費については止宿とだけあるが、夜具は持参せず、宿泊所のものを使用、会所には夜具五二通(九〇通、ぜんわん五〇人前)百人前程が用意され、三食膳料をとっており、昼食は弁当になっていた。

時代は少し下るが参考のため、文化五年ホロボツ場所での宿泊所の副食についてみると、夕食「汁・豆腐、平焼、しいたけ川魚、焼魚、ヒラメ、香物」で、朝食は「汁・菜、平焼、八杯豆腐、焼物、鮭塩引き、香物」とあり、昼は弁当で、夕食時に注文すれば酒も出してくれた(注2)。

享和三年(一〇八三)になって箱館奉行は「先触案」を示達した。長距離区間の旅行に対応できるよう、悪天候、病氣などにより旅行日程が変更になる場合は前宿より通知し、決められた膳料を払い、一汁一菜香物とし、継立区間ごとに受領証を徴するものであった(注3)。

先触では、天気次第では日限を引き延ばすことがあれば、アッケシ、クナシリ辺りまでは、行き届くことはないの、心得ていて欲しいとある。それが八月七日(新暦九月二五日)にはニシベツ(現別海町本

別海)に到着し、ネムロを横切り、よりクナシリに近い地点まで来ていたので、この点では伊能は満足していたのかもしれない。

次に箱館からのニシベツまでの日数、宿泊地を見ると、六九日をかけ、二九カ所に宿泊しているから、一カ所二・三日滞在したことになる。一泊は五カ所で、ムロラン(仮家)・サルモンベツ(仮家)・ムクチ(会所)・クスリ(会所)・ノコリベツ(番屋)、二泊は一五カ所で、大野(宿屋)・長万部(会所)・ホロボツ(会所)・シラライ(会所)・ユウフツ(会所)・ニイカッブ(会所)・ミツイシ(会所)・シヤマニ(会所)・ホロイズミ(仮家)・ドウブイ(仮家)・オホツナイ(仮家)・シラヌカ(仮家)・コンブムイ(本番屋)・ゼンホウジ(本番屋)、三泊は四カ所で、山越内(支配人宅)・レブンゲ(仮家)・アブタ(仮家)・アツケシ(仮家)、四泊は四カ所で、鷺ノ木(宿屋)・サルル(番屋)・シヤクベツ(仮家)・アン子ベツ(番屋)、六泊は一カ所でピロウ(仮家)であった。復路は三二日で、宿泊地は二八カ所であった。

この中で天候や通行事情以外で長逗留となったものがあり、レブンゲでは支配勘定田辺安蔵の行なうオムシャ(アイヌに酒・米・煙草等を与えて恩恵を施し、制令を伝える支配的な儀式)を見学するため、アブタでは同田辺安蔵の所有する東蝦夷地の図を写すため逗留した。鷺ノ木では村上島之丞宅を見舞い、この時に間宮林蔵にも会ったとされている。また、紛失届を出していた品が宿泊先に届いたので、その事務処理があった。アン子ベツではネムロからの迎え船を待ったが、詰合がニシベツの鮭漁に出役のため、ニシベツからの迎えを待たためである。最も長い六日間逗留したピロウでは、幕府の要人である納戸頭取並戸川安論、納戸大河内善十郎の巡視と重なり、「測量日記」に

「両公御通行に付き場所場所、人馬、御宿場へ取揃候に付、宿所並に人馬差支えに付此所長逗留に相成候」とあって、伊能の通行は両公がピロウを出立するまで、この場で待機となったのである。

ニシベツは蝦夷地でも最も優れたサケ漁場で、ここではネムロ会所詰の御勘定大嶋栄治郎、御普請役井上辰之助、在住村上治郎右衛門等が出役し、献上鮭漁が行なわれていて、ネムロ会所は空の状態になっていた。このため、詰合よりネムロへは船や人足は出せないで、ここで測量を済ませて欲しいとの相談があった。伊能も現場を見て承知するしかなく、帰りの人足と渡船を願ひ出た。ネムロ詰と同支配人により飛脚を以つてアッケシ会所に迎船を出すよう触れを出した。これに併せ、伊能は次の先触を出した。

覚 (封紙先触) ニシベツよりアッケシ迄

一、人足 七人

右者我等儀、蝦夷地測量御用相済、明九日ニシベツ出立、其地江罷越候間、書面之人足御定之賃銭請取之、聊無遅滞渡海止宿等之儀、是又差支無之様執斗可給候、以上。

申八月八日

伊能勘解由 印

悪消支配人中

(「蝦夷手役志」)

この先触では人足七人になっており、この地に馬はまだ入っていないかった。馬は寛政十一年(一七九九)南部馬六〇頭を購入して各場所配置し、猿留・様似山道の開削により、同一二年(一八〇〇)に釧路まで馬行が可能となったが、蝦夷地で馬の繁殖を行なうのはウス・アブタ牧場を開設した文化年間以降(一八〇四)であった。(注4)。

人足数の増加は(往路は人足にすると五人)秋も深まり帰路を急いだ伊能の一方的な考えからか、或いはここで測量済となり帰還する一行に同情したネムロ詰の配慮があつたのかもしれない。

アッケシでは詰合に伺つたところ、エトモから砂原への船便を利用した方がよいと言われ、八月一日に箱館までの先触をエトモ留め置きとして発し、荷物と人も乗れる馬二疋に変え、人足三人とした。九月三日にエトモに到着したが、順風が無く砂原、アブタへの渡海は無理となり、ムロラン(現崎守)に渡り、先触を箱館留めに直してアブタより出した。九月一日箱館に到着し、直ちに御番所へ帰着届けを出し、小林新五郎取次ぎの添触を返し、帰府の添触の発行を願ひ出た。翌日には江戸千住宿までの添触が渡された。

覚 (御添触写し)

一、馬 二疋

一、人足 三人

右者此度蝦夷地為御用、津田山城守知行所下総国佐原村元百姓當時浪人伊能勘解由、右御用相済帰府致候に付書面の人馬同人談次第、御定之賃銭請取之、無遅滞可差出之、且又渡船川越止宿等の儀茂、是又差支無之様執斗可申候、以上。

申九月

寺田忠右衛門 印

水越 源兵衛 印

箱館より松前津軽三厩夫より奥州道中千住宿迄

右宿々 名主 問屋 年寄

覚 (先触)

一、馬 貳疋

一、人足 三人

右者我等儀、為測量御用蝦夷地江罷越、来ル十四日上下五人箱館町出立、三厩迄罷通候間、書面之人馬御定之賃錢請取之、聊無遅滞差出、且又繼立渡船渡海川越止宿等之儀、是又差支無之様執斗可給候、以上。

申九月十二日

伊能勘解由 印

從箱館町三厩迄

右村々 名主 年寄中

泊り順 十四日茂戸地、十五日知内、十六日福嶋、十七日松前町
尤雨天ニ候得ば逗留之儀も可有之候間、右之心得ニ而執斗可給候、以上。

(「蝦夷于役志」)

伊能忠敬一行は予定通り一七日に松前に到着し、唐津内町の升屋に宿をとり、翌一八日に弁天の前山に登り、大島・小島等を測量した。午後順風となり松前侯の御役船で、松前侯より海岸に二人の侍の見送りを受けて、蝦夷地を離れた。蝦夷地の滞在は五月十九日(新暦七月一〇日)松前領吉岡に着船、風待ちのため吉岡に宿泊以来、松前を離れた九月一八日(新暦十一月四日)までの一一八日間であった。

紛失物の順達書と添触・書簡について

箱館に着いて大方位盤の箱入り金具がないことに気付いて伊能は、これを探して箱館の旅館に届けて欲しいと、箱館から吉岡村迄の順達書を出し、津軽三厩村の庄屋工藤忠兵衛宛に書状を出していた。

從箱館吉岡村迄 順達書

一、我等当月一九日、三厩より乗船風不宜吉岡村着、夫より陸を

罷越候、人足持の内、五本入扇子箱に入候金具、宿場之内にて取落候哉。箱館に而相改候処、相見え不申候。若見当り候はば、箱館宿伊藤茂左衛門方迄継送り可給候。尤三厩より船積に致候に相違無之候間、此段三厩江も申遣候、以上。

申五月

伊能勘解由

戸切地村、三谷村、富川村、茂戸地村、泉沢村、札狩村、喜古内村、知内村、福嶋村、白符村、宮歌村、吉岡村留

右村々 名主 年寄中

(「蝦夷于役志」)

津軽三厩村庄屋工藤忠兵衛への書状は順達書の内容とほぼ同じだが、小物ゆえ船中より吉岡村の止宿所に揚げ残したかもしれず、船頭に尋ねて、もし見つかったら箱館の旅館伊藤屋へ継ぎ送りして欲しい。念のため、吉岡村までの右の順達書を出していると言うものであった。

この順達書と書状は三厩の發送日(五月二五日)からして、箱館到着直後に出されたものと思うが、伊能一行は二九日に大方位盤を箱館に残して出発した。箱館御番所の添触では馬が一疋減つて、「馬一疋・人足三人」となった。伊能の蝦夷絵図の添書に「大方位盤は無拠、箱館に残し置き候」とある。この「よんどころなく」は金具の紛失を意味するもので、せつかく人足により箱館まで運んだが、やむを得ず持ち込むのを断念したのである。この大型荷物である大方位盤が減ったことにより、箱館御番所は馬一疋としたのだろうか。大方位盤が無いのに、金具だけが伊能のもとに届いたのは、何とも皮肉っぽい話である。

伊能は箱館の旅館に届けて欲しいとしたが、箱館の村役人から継ぎ送りにより、六月三日滞在中の鷺ノ木の宿に届いた。村役人はこの紛失物が無ければ測量に困ると思つて、クナシリまでも追っかけるつもりで継ぎ送りしようとした。でも、伊能にとっては無駄であった。

それにしても、順達書と書簡だけで、本州から海を越えて各村を継ぎ立てして本人に届けられる仕組み、村役人がいかに誠実であったかを改めて知った。三厩を発送した紛失物は六月三日、順風に恵まれたとはいえ、九日間で本人に届いた。実に鮮やかな連携プレーであった。

配賦

三厩庄屋 工藤忠兵衛

覚

公儀御役人 伊能勘解由様御紛失物 但油紙包縛結差札印附

右の通継送申候、途中随分勞候而相違候様、此旨得御意候、已上。

申五月廿五日

三厩庄屋 工藤忠兵衛

松前城下夫より御領箱館迄各宿村 名主 年寄中

添触

箱館月番名主 大野村初

御用

一、油紙包箱 老揃 但シ、白糸結差札封印有

外ニ工藤忠兵衛より配賦添

右者津輕三厩より昨日到来に付、今般継送申候、伊能勘解由様御旅行先迄無遅滞相届可被申候、以上。

申六月朔日

箱館月番名主 矢川四郎左衛門 印

大野村始 クナシリ辺迄

長谷川太左衛門 印
(「蝦夷千役志」)

また、蝦夷地内では九月三日に蝦夷地取締御用掛三橋藤右衛門より御用人武藤貫三、大塚一郎名目の書簡、シラライ詰長島新左衛門の添簡付で、エトモ宿に届いた。これは藤右衛門より天文来歴の書付を帰府までに差し出すよう仰せつかったものであった。

一筆致啓上候、弥御堅固可被成御旅行、珍重存候、然者天文開け候、年曆並唐土紅毛伝来の趣等十分に御書取御見世候の様、自拙者共可申入の旨、藤右衛門被申付候、御帰府迄の内に御認候て御差出可被成候、此段申入度如此段、以上。

八月十九日

三橋藤右衛門内

大橋一郎 武藤貫三

伊能勘解由様(箱館迄の内旅行先)

(「蝦夷千役志」)

この書簡が発せられたのは、伊能一行が帰路を急ぐ十勝のオホツナイからドウブイの仮家に到着した時で、翌朝(新暦一〇月八日)は厚さ一〇二分(一〇〇二〇ミリ)の氷がはった(注5)。この書簡は十勝から帰る伊能に継ぎ送りで渡そうとするもので、箱館から各村役人、会所役人を経て本人の宿泊先に向かい迫っていたが、九月三日にホロボツ会所に到着した。しかし、伊能一行は大雨ではあったが、エトモに向けて出立した後であった。

これを受けたシラライ・ホロボツ詰御普請役長島新左衛門は自分の添簡と共に、エトモ宿に送り返し、無事伊能に届いたのである。この書簡は八月一九日に箱館から出され、九月四日に伊能が受け取ったので、一五日間を要した。一カ所の戻りがあったので(二日間)、実質的には一三日で届く計算になる。当時は夜中便がなく、八宿を経ているので、二日を要したのは三、四宿だけであり、スムーズな継ぎ送りであったといえる。この結果であるが、江戸に帰着後、高橋天文方の校閲を得て一〇月二五日に提出された。

このほか、伊能は蝦夷地においてアブタ会所、アッケシ会所から高橋天文方等に御用書状を出し、サルル番所で伊能三郎右衛門、大川治兵衛からの書状を受け取った。

あとがき

伊能忠敬が箱館や各地会所で会った詰合は、ほんの数ヵ月前まで江戸でばり仕事をしていた幕吏たちであった。幕府は蝦夷地勤務者の選定にあたり、身体強健、意志堅固であることを条件に、家族親戚と熟談させ、特に希望する者を採用した。蝦夷地はそれほど厳しいところだったのである。

宿駅制は本州の例により、東蝦夷地においても実施された。制度上はかなり整っているかのようにみえるが、道路、止宿所は建設中のものが多く、数里から十数里も人家や会所施設が無く、人馬継ぎ立ても不十分であった。この時期に測量が出来たのは、不備ながら宿駅制が整っていたこと、伊能一行の努力と幕吏たちの存在であつたろう。

(注1)「新北海道史第二巻」 昭和四五年 北海道

(注2)「西蝦夷高島日誌」 文化五年 新しい道史第四三・四四号

(注3)「北海道宿駅(駅通)制の研究上」 宇川隆雄 昭和六三年

(注4)「日鑑記」 昭和四六年 釧路市

(注5)「蝦夷于役志」 伊能忠敬 寛政二二年

(ほりえ としお・苫小牧駒沢大学非常勤講師、平凡社日本歴史地名大系「北海道の地名」編集委員)



史料探訪

最終本・伊能図の消息など

渡辺 一郎

戦前は国定教科書に登場した有名人だったが、戦後は歴史家が殆ど取り上げない伊能忠敬を地図の面から調べて、伊能忠敬再発見を提唱してから約七年になる。最近では少しは人々の関心と呼ぶようになったようである。どうしてこう伊能図がよく発見されるのでしょうかと聞く新聞記者がいるが、今まで研究する人がいないから、判っていないことが多いのだと答えることにしている。今回は、最近見た史料から最終本伊能図の消息を紹介したいと思う。

上呈本伊能図は現在すべて無くなっているが、忠敬の跡を継いだ孫の伊能忠誨(ただのり)の日記によると、最終本の大図二一四枚、中図八枚、小図三枚は、文政四年七月一〇日、高橋景保が忠誨と下役三人を伴って登城し、老中、若年寄の面前に、日本の西半分を接続展示し提出をおわったとある。このとき、『大日本沿海実測録』一四巻も提出されたが、『大日本沿海実測録』は上呈本を含め、当時作成されたものの三点が国立公文書館内閣文庫に現存する。

伊能図がひとつも無いのに、どうして実測録だけが三部も現存するのかと素朴な疑問が生じるところである。上呈のとき、西半分しか展示されなかったのも、不思議の一つであるが、これは江戸城の大広間の大きさが五〇〇畳くらいだったから、物理的に全図を展示する広さが無かったためと考えられる。伊能大図をすべて地形に従って並べる

と60^冊×30^冊必要である。北海道を日本海の真中に配置しても40^冊×25^冊くらい必要である。それほど膨大なものだった。

幕府の紅葉山文庫を管理する御書物方の日記の文政四年十一月三日の項に「先だつて七月中に仮に預かった実測輿地図のうち、堀田攝津守がお留めになっていた小図一卷三張、輿地実測録一四冊箱入りを、家臣の田中龍之助を通じて預けられた。先だつて、仮預かりとなつていた左の図も残らず御預かり（入庫）となり、すべてを改めて御預かりした」と記されている。内容は実測輿地全図 三〇軸六箱 中図二軸 小図一軸であつた。（福井保「徳川幕府編纂物解説編」）これにより、紅葉山文庫への正式な入庫は文政四年十一月三日とわかる。

明治の伝記作者・大谷亮吉の『伊能忠敬』では大図三〇巻とある。巻はひと括りの意味と理解し、地図はバラと考えていたが、軸とあるからには軸装されていたらしい。二一四枚を三〇軸ということは、一軸に大図七枚くらい収めていたことになる。一枚が一疊はあるので、疊七枚が敷ける掛軸である。10^冊×3^冊というような、凄まじい大きさの軸だったろう。いままで大図はバラの二一四枚とばかり考えられていたが、こんなでかい軸になっていたというのは新発見である。

中図を二軸にというのは簡単に見当がつく。東北地方以北で、3.5^冊×3.5^冊、関東から九州まで3.5^冊×5^冊位だろう。小図だと4^冊×4^冊位となる。こんな凄い地図の巻物が提出されていたのである。

つぎに、この本物がいつまで実在したかである。幕末については、紅葉山文庫の『元治増補御書籍目録』御家部に

実測輿地全図 三〇軸

同 中図 二軸

同 小図 一軸

輿地実測録 一三巻 首一卷 附接成便覧一巻 十四冊

とあるから（福井前掲資料）、元治年間（一八六四）まで保存されていたことが明らかである。ここでも軸を単位としているから、前述の巨大軸の推測が裏付けられる。

上呈本伊能図の焼失の経緯については、明治初年のオーストリア万国博に日本全国を出品することになり、明治六年太政官正院地誌課で、伊能図を紅葉山文庫から取り出して写しを製図中、火災にあつて焼失した。「公文録」第七三八所収の焼失書目に「実測輿地図三箱三十巻、中図二巻、小図一卷」とある（福井前掲資料）というから、このときの焼失も残念ながら事実である。大日本沿海実測録は貸し出されていないのだから焼けなくて当然ということになる。

その後、地誌課は伊能家から副本（控図）の献納を受け、内務省地理局が保管し、明治二三年に同省から内閣文庫に移管した（福井前掲資料）。その図を東京大学に貸し出し中、関東大震災で焼失したと伝えられている。

しかし、東京大学総合研究博物館には関東を欠く七枚の伊能中図が保管されており、来歴については明確ではない。七枚のうち北海道の二枚は明らかに異種の写本であるが、残り五枚は針穴があり、描画も丁寧である。理学部の事務室にひどい状態で置かれてあつたものを整備したという。福井氏も指摘しているが、五枚は伊能家提出の控え図の公算が高いと考えている。前から私はそう思っているの、同じ思いの方がいるのは心強いが、これを証明するのは大変である。用紙、筆跡、絵具、描画法など夫々専門家の協力を仰がねばならない。他の美術品などでおこなわれている努力と比較すればいたって簡単と思うが、やってみようという人はなかなか現れない。目下の伊能忠敬研究はそんな程度である。

校歌にみられる「伊能忠敬」

成家 淑子

二〇〇一年一〇月二〇日、富岡八幡宮で行われた伊能忠敬銅像除幕式に、宮司富岡興永さんは旧制佐原中学校（現県立佐原高等学校）で当時歌われていた伊能忠敬の名前のでている校歌をなつかしく歌いなられた。

富岡興永さんは旧制佐原中学校出身で「伊能忠敬の地・佐原」で青年時代を過ごし、現在富岡八幡宮の宮司のお仕事をなさっている。私の母校でもある。そのような校歌のあったことは全く知らなかった。

そこで佐原市内の学校の校歌に伊能忠敬の名前の出てくるものについて調べてみた。又旧制佐原中学校の校歌を「佐原高等学校百年史」より調べていくうちに、旧制佐原中学校の教育の中に伊能忠敬について記されている部分があったので紹介したい。

一、伊能忠敬の名前のある校歌と学校 *校歌については後記参照

□佐原市立佐原小学校 昭和38年頃制定

- ・ 桜井 弘作詞 山本 丈晴作曲
- ・ 詞句二番 香取の神々 忠敬翁が
- ・ 現在も歌われている

□佐原市立第二中学校 昭和32年3月制定

- ・ 佐原小校章は伊能忠敬翁の地図に付された八方位を象す
- ・ 佐々木信綱作詞 信時 潔作曲
- ・ 詞句二番 かなたに仰ぐ香取 諏訪の森 忠敬先生

・ 現在も歌われている

□千葉県立佐原中学校（旧制） 昭和3年10月制定

（現・県立佐原高等学校）

- ・ 葛原 函作詞 小松 耕輔作曲
- ・ 詞句二番 関東平野 朝に夕に 忠敬翁の遺徳に
- ・ 戦後歌詞が時代にあわないことから今は歌わない
- ・ 忠敬翁の百年祭（大正八年）銅像除幕式の歌は佐原中学校教諭伊能甲之助氏作

□同校 昭和16年5月制定

- ・ 土岐 善麿作詞 乗松 昭博作曲
- ・ 詞句三番 たゆみなし 偉人あり遺徳 忠敬名は
- ・ 戦後歌詞が時代にあわないことから今は歌わない

□千葉県立佐原高等学校（旧制） 昭和5年制定

（現・県立佐原女子高等学校）

- ・ 高野 辰之作詞 信時 潔作曲
- ・ 詞句二番 神つ代 伊能氏のいさを
- ・ 戦後歌詞が時代にあわないことから今は歌わない

市内には、小学校十一、中学校六、高校三ある。その中で、地元の小学校、地元の旧制中学、旧制高女と香取神宮のある佐原第二中学校の校歌に、その名前が出てきている。地元の旧制中学、旧制高女は、戦後歌詞が時代にそぐわないとして歌われなくなったようである。

しかし、旧制中学・旧制高女で教育された人達にとっては「郷土の偉人・伊能忠敬」は忘れられない存在であろう。

校歌から伊能忠敬の名前が少なくなってきたのは、教育や音楽が時代とともに変化してきたからか。川尻信夫さん（*1）は「佐原高等

学校百年史」付章の校歌・応援歌の中で次のように書かれている。

『日本のある学者の「昔は学生の歌が大衆の歌だったが、今は大衆の歌が学生の歌である」という文を読んだことがある。……』

最近、うたには「伊能忠敬」のような固有名詞はあまり使っていないがこの川尻信夫さんの言葉になるのだろうか。「伊能忠敬」も学生の歌から消えつつある。しかし、映画「子午線の夢」で歌手小林幸子さんが歌っている。老若男女、学生だけではなく社会全体で歌っているのだ。

「伊能忠敬」の人物像を求めて：みんなで歌っていこうではないか。
「夢を訪ねて、人生、地図のない旅」と

二、旧制佐原中では、創立のころから校歌ができるまでどのような教育がなされたのであろうか。

「佐原高等学校百年史」第三章佐原中学の発展の中で「伊能忠敬記念会」が大きくとりあげられていることは注目すべきことであろう。

① 創立の頃（初代校長海塩錦衛明治33～34年）（*2）

地域の偉人としての伊能忠敬について研究がなされ、基礎をつくつていた。

1 生徒の訓育

香取の武、小御門の忠、忠敬の文を中心としていた。

2 伊能家文書の解説

校長、国漢担当加藤教諭等とともに伊能家文書の解説を中心に研究する。

3 研究を学報にのせる。

八号については戦捷記念でありながら、伊能忠敬研究が半分以上のついている。（海塩校長の序文参考）

4 帝国学士院の事業として、忠敬研究が開始され、理学士大谷亮吉の協力者として、海塩校長、加藤教諭がたずさわっている。

5 明治42年 同窓会で理学士大島亮吉の講演が行われる。

6 忠敬記念会の年中行事開催への準備をする。

② 明治45年第一回忠敬記念会発足

この発案、日の決定は、創立当初の海塩初代校長である。

明治45年6月11日行われている。現在でも残っている「佐原市の忠敬記念日」のはじまりである。

その時のようすは、学報十四号に記されている。中でも、訓話に

『本校の年中行事の一として執行するの趣旨と諸生よくこの趣旨を体し、この挙をして永遠に大に有効ならしむるに努むべく、決して無意義ならしむる莫れというに在りき』

当日の盛事を

『折りしも一天全く晴れて、この思出多き記念会に列せんとて昇校せる来賓陸續たり』

1 観福寺で先生の展墓

2 生徒製作品陳列

習字、作文、英作文、測量年表等

先生に関する詩句、先生の墓銘の一節を習字に書く

作文では「何をか偉人より学べる」「偉人と後進」等

第五学年伊能康之助氏（*3・伊能洋さんの父）の作品が記述してある。あの美しく描いてある「天橋立付近沿海測量図」の複写である。

3 遺物展

伊能三郎右衛門氏蔵の一部を借用して行う。これは伊能忠敬記念館ができるまで行っていたらしい。伊能康之助氏の美挙に感謝していきたく感じる。

4 千葉中学校長海塩錦衛氏の講話

『：偉人の遺徳に一層の光彩を添えしとともに後進を激励すること多大なりき』

③講演会

東京帝大教授長岡半太郎、京都帝大教授大谷亮吉、学習院大教授白鳥庫吉等の講演会も行われている。旧制佐原中学では、創立頃より大正・昭和初期頃まで、忠敬についての学問が取り上げられていることがわかる。これが昭和三年制定「競ひて群立ち天を衝き…」の校歌になっているのだろうか。

川尻信夫さんは、昭和初期の佐中生にとって忘れられない懐かしい歌であると書いている。

関東平野の空高く

筑波の峯ぞほゝめめる

朝に夕に打ち仰ぐ

忠敬翁の遺徳ぞ尊と

崇き御教心と

高嶺を攀じて勇まし我等

葛原 函作詞（一番三番略）

この校歌は、旧制佐原中学生は朝、夕に一人で、時にはみんなで口

ずさみ、声をはりあげて歌い、青春時代の生命の充実につとめてきたものだと思う。

学窓を巣立ち「郷土の偉人・伊能忠敬の地」佐原中学校で培われた精神は消えることなくよき第二の人生となっているであろう。

*1 川尻信夫氏は本会会員、東海大名誉教授、数学・数学史。「佐原

高等学校百年史」編集委員長

*2 本内容は「佐原高等学校百年史」記載のものを使用

*3 伊能康之助氏は伊能洋さんの父上。第九回の旧制佐原中を首席卒業。三井物産関連会社の社長。忠敬の遺品すべてを佐原市に寄贈している。

（なりや よしこ・佐原市）



校章の制定は大正4年11月10日である。デザインは郷土の偉人伊能忠敬翁の地図に付された八方位を象ったもので、教育方針の誠実、礼儀、勤勉、進取、共同一致、学問、忍耐、科学の八訓を表徴したものである。

参考資料

佐原市立佐原小学校校歌

作詞 桜井 弘

作曲 山本 文晴

一、
ゆたかな利根の 歌声に
みのりのときを まねく土
そうだ いのちの ふるさとの
土を愛して 育つのだ

佐原 佐原 佐原小学校

二、
香取の神に 守られて

忠敬翁が しいた道

そうだ 教えの 花かおる

道を はてなく 伸ばすのだ

佐原 佐原 佐原小学校

三、
かがやく屋根を よせながら

あしたの夢を ひめる町

そうだ 栄える 日本の

町を仲よく きずくのだ

佐原 佐原 佐原小学校

佐原市立第二中学校校歌

作詞 日本芸術院会員

作曲 //

一、
豊けく広き大利根川を

見よや海に行くと休はずたゆまず

佐々木 信綱

信時 清

吾ら学びの窓につどいて

勤しみ励まむ励まむ共に

吾ら佐原第二中学校

二、
かすたに仰ぐ香取の宮居（みやい）

諏訪の森にいます忠敬先生

古き文化の はかぐわし

新たに興さむ興さむ共に

吾ら佐原第二中学校

三、
筑波嶺かすむ三年の春を

吾ら日毎日毎力を協せて

よき師よき友和み親しみ

未来を築かむ築かむ共に

吾ら佐原第二中学校

佐原中学校校歌（昭和三年制定）

葛原 幽 作詞

小松 耕輔 作曲

一、
競ひて群立ち天を衝き

鉾杉若き意気しめす

香取の宮の大前に

誠を誓ひ輝く希望

遠き闇路も照らすとばかり

我等のかざせる光を見よや

二、
関東平野の空高く

筑波の峯ぞほゝゑめる

千葉県立佐原中学校校歌

詞曲に

島家 高 作詞
小松 純 作曲



(昭和3年10月制定)

佐原中学校校歌(昭和十六年制定)

土岐 善磨 作詞
乗松 昭博 作曲

一、窮みなし天地国は広し

大利根は遠く海に注ぎ

筑波嶺雲青し

空は晴れて

希望に高なる若き胸

信義は堅し

無窮が丘の健男児

二、撓みなし使命力あふる

偉人あり遺徳誇れ郷土

忠敬名は薫る

尽きぬ功績

櫟の緑に樟の香に

誓ひをこめん

無窮が丘の健男児

三、一字なり八紘国は久し

一億の心今ぞ一つ

雄々しや往き進む

遺は新た

仰ぐは香取の宮柱

鏃に磨く

無窮が丘の健男児

あした 朝に夕に打ち仰ぐ

忠敬翁の遺徳ぞ尊と

崇き御教心の杖と

高嶺を攀じて勇まし我等

三、荒濤逆巻く大洋へ

洋々として「剛健」の

はた「邁進」の象徴とて

大利根こそは日に夜にそそげ

起てよ励めよ佐中の健児

日本帝国我等を待てり

千葉県立佐原中学校校歌

上野 辰之 作詞
信時 潔 作曲

莊嚴の道マシク



(昭和16年5月14日制定式)
9月29日認可

偉人の像

佐原中学校教諭 伊能甲之助氏作

大正八年三月二日除幕式に合唱せしもの

斯の人出てゝわか國の
この人ありて此郷の
さやけき利根の月影は
棚引く諏訪の山さくら
花と月との中しめて
剛毅の操しのはれて

正しき形知られけり
名はとこしへに傳はらん
君が光を添へぬへし
君がほまれと匂ふらむ
立つや偉人の記念像
不朽のかゝみ仰かるゝ

佐原高等女学校校歌

高野 辰之 作詞
信時 潔 作曲

- 一、船唄の絶えぬ大利根
朝夕に眺むる佐原
此処にして諏訪の神山
緑濃き背にして立てり
もの学ぶ女の我等
喜びて通う学校
- 二、神つ代に国ことむけし
香取なる武の神たふと
近き世に国はかりて
伊能氏のいさをもしるし
水の郷佐原の此処よ
仰ぐべきものぞ さはなる
- 三、大利根の広きまねびて
宮の千木高きをのりに
志堅くまもりて
優しきを保ちてあらむ
佐原なるをみな我等
此処にして学ぶ我がどち

佐原高等学校百年史

大正期の佐原中教育から

1 伊能忠敬記念会

海塩校長転任

明治四十四年七月二十日、初代校長海塩錦衛は千葉中学校長に栄転し、同日、千葉師範学校教諭竹内喜之助が佐中第二代校長に就任した。明治はもう一年続くのだが、本書ではこの竹内校長就任から大正時代の記述を始める。

明治天皇の崩御によって世の中の空気が変わったというような表現が各書に散見するが、事實は、明治も四十年代になると世の中ではいろいろな面での変化が目に見えるようになっていた。偶然ではあるうが、ちょうどこの時期に、創立以来一一年間、佐中の基礎固めに大きな功績をあげた海塩校長が栄転し、前校長とは肌合いがかなり異なっていたらしい第二代校長が就任したのである。

海塩時代の忠敬研究と『学報』八号

竹内校長の初仕事は東宮行啓記念碑除幕式だったが、これは前述のように、既に準備がすっかり出来上っていた所に赴任して来たので、いわば形式的に除幕式を主催したにすぎない。実質的な仕事始めは四五年度の忠敬先生記念会ということになるが、これも海塩校長が準備を進めていたものである。そこで、話はさかのぼるが海塩時代の忠敬研究について述べておこう。

海塩校長は、香取の武、小御門の忠とならんで、忠敬の「文」を生徒訓育の中心としていた。そのため、国漢担当の加瀬宗太郎教諭等とともに、伊能家文書の解説を中心に忠敬研究を進めていたらしい。その成果の一部が明治三十九年七月発行の学報第八号である。この号は

日露戦争の「戦捷記念」と題しながら華やかな気分の記事はほとんどなく、全体の半分以上の七七ページが「伊能忠敬先生事蹟」という特輯である。加瀬の筆になる忠敬伝を中心に、地図凡例の説明、墓碑銘、贈位の顛末など各種の記事があるが、どれも資料そのものの転載とその地道な解説に終始している。特筆すべきは、忠敬の手紙、門人から忠敬への手紙など、それまでは外部の眼にはほとんど触れていなかった資料を解説したものを中心に掲載してあることである。これは、単なる偉人伝として舞文曲筆をまじえた忠敬描写ではなく、本格的な忠敬研究の第一歩を印したものとして評価されるべきであろう。

戦捷記念と忠敬は結びつかないように思えるが、これについては巻頭の例言に次のようにある。

本号は戦勝記念として、専ら伊能忠敬翁の事蹟を掲ぐ。これ明治の今日を謳歌すれば、随いて国家に功労ある翁の偉績に想い到ればなり。

この例言は、海塩の序文（原漢文）の次の部分にあたる。

今や六師凱旋し、国勢ますます張る。実に飛竜天に沖し、沛沢四被の概有り。余、委に由り源を尋ぬるに、未だ著て翁の侠烈聲喝に想到せずんばあらず。此次、学報専ら其の伝を載す。今日の慶を表し昔人の労を忘れざる所以としか言う。

戦勝を単に浮わつた気分ではとらえていない。ここに見られる海塩校長を中心とする当時の佐中教員の見識はさすがと言うべきであろう。たまたま四十二年六月から帝国学士院の事業として忠敬研究が開始され、理学士大谷亮吉（後に京都帝大教授）が直接担当者となった。大谷の研究開始より佐中グループの方が早いのである。大谷はその後しばしば佐原を訪れることになり、海塩等はその協力者となった。前述の四十二年同窓会での大谷の講演はこの関係による。

海塩校長は忠敬記念会を本校の年中行事として開催したいという希望を抱き、その日取りを大谷と協議した。その結果、忠敬が第一回測量のため蝦夷地に向つて深川黒江町の家を出発した寛政十二年（一八〇〇）閏四月十九日を太陽曆に換算した六月十一日が適当と決定した。しかし、海塩校長は間もなく転任してしまつたので、在任中には記念会は実現できなかった。

第一回忠敬記念会

海塩校長の後を継いだ竹内校長も記念会については同意で、四十五年六月十一日、第一回忠敬記念会は予定通り開催された。当日の盛事を『学報』一四号は次のように伝えている。

かくて所定の日六月十一日は来りぬ。朝来の薄陰りにて如何にと氣遣われぬ。午前七時職員生徒は校庭に整列し、学校長より一場の訓話ありき。要は本年度より忠敬先生記念会を本校の年中行事の一として執行するの趣旨と、諸生よくこの趣旨を体し、この挙をして、永遠に大に有効ならしむるに努むべく、決して無意義ならしむる莫れというに在りき。

右の後七時三十分出発し、伊能家の菩提寺なる香西村牧野区観福寺にいたり、先生の展墓をなす。先づ寺僧に導かれて、第一次に職員展墓学校長総代として焼香す。つぎには五学年一組より順次展墓し、八時三十分全部学校に帰着す。折しも一天全く晴れて、この思出多き記念会に列せんとて昇校せる来賓陸續たり。

諸校内当日の設備は左の如かりき。

一、来賓室、学校長室と応接室と一学年一組とをもつてこれに充て盆裁供菓等それぞれの設備をなせり。

一、本校生徒製作品陳列室、二学年一組の教室をもつてこれに充て、左の各種を陳列したり。

A 習字 第一学年 半紙十四字詰（先生に関する詩句）

B 作文 第二学年一組 半載紙（先生の墓銘の一節）

第三学年一組 （何をか偉人より学べる）

第四学年 （伊能忠敬）

第五学年二組 （偉人と後進）

C 英作文 第五学年一組 （忠敬逸話）

D 表 第二学年二組 （伊能忠敬測量年表）

E 図 第五学年伊能康之助（天橋立付近沿海測量図の複写）

一、忠敬先生遺物展覧室、補習科教室をもつてこれに充つ。遺物は伊能三郎右衛門氏蔵の一部にして、同氏より借用したるものなり。その種目左の如し。

1 家訓一幅（手書）、贈問宮宗倫序一幅（同上）遺書数十部数

百冊（大抵先生の手書にて、その重なるは、測量日記、山嶋方位

記、旅行記、その他数学上の著書、抄書および手翰の類、墓誌

銘（佐藤坦の選文にて、浅草源空寺所在墓面の榻本なり）

2 地図数幅（大小あり、皆先生手書のもの）

3 測量機械数点（象限儀、測蝕定測機、觀星鏡、尺度、半円方

位盤、量程車、垂揺球儀、小方位盤）

4 御用旗二流（測量当時所用のもの）

5 日英大博覧会出品記念章

6 肖像（石膏製塑像にて学校蔵品）

午前九時本校講堂なる会場は開かれぬ。会場正面には伊能家所蔵の先生の肖像を掲げ置かる。来賓は当日の主賓たる伊能三郎右衛門氏を始めとし外同族数名、海塩千葉中学校長、本郡長、内務土木監督署員、

裁判所判事、税務署長、高等女学校長、郵便電信局長、各小学校長、新聞記者、その他地方有志者卒業生数十名におよべり。

九時半学校長の開会の式辞ありて、直ちに千葉中学校長海塩錦衛氏の講話あり、真摯周到偉人の面目を発揮して遺憾なく、後段後進者と偉人との関係を叙して、偉人の遺徳に一層の光彩を添えしとともに後進を激励すること多大なりき。十時十分に至りて已めり。(中略)

ここにおいて学校長より会終了の式辞ありて、後來賓は陳列品の縦覧をなし終りて茶果を呈す、やがて退出せらる。その後本校生徒は年級順次に遺物製作品を縦覧して退出せり。午後には、郡立高等女学校職員生徒、佐原尋常高等小学校職員生徒外一二校の参観と町内有志者の縦覧あり、午後三時にいたり、全く会を閉ぢぬ。かくて第一回忠敬記念会は無事円満に結了しぬ。

ここに見るように、忠敬の遺品はすべて伊能三郎右衛門家の所有であった。それを、文中に「第五学年伊能康之助」とある伊能が、後に旧宅やその敷地を含む忠敬関係の遺品すべてを佐原市に寄贈したのである。この伊能は第九回の首席卒業生で、東京高商(一橋大)に進み、卒業後三井物産に勤務した。後には同系子会社の社長になり、三郎右衛門家の当主でありながら東京に永住することになったので、この美挙に及ばれたのである。現在、佐原市営の博物館としての忠敬記念館があるのはひとえに伊能康之助の厚意によるものである。

この記念会は、学校行事としては昭和二十二年まで続いた。生徒作品の展覧はいつの間になくなったが、学年毎に習字や作文の題をきめて作品を製作する形式は、長い間佐原小学校に受けつがれていた。講演会はその後も開催され、大正二年には東京帝大教授岡半太郎理学博士、「伊能忠敬」の著者大谷亮吉、三年には学習院教授白鳥庫吉

文学博士が来校し、講演している。現在でも佐原市は六月十一日を忠敬記念日として毎年各種の行事を催しているが、この記念日の発案、日の決定は海塩校長によるものである。

皇太子忠敬遺品見学

少し日は飛ぶが、大正二年十一月八日、皇太子(後の昭和天皇)淳宮(あつのみや・後の秩父宮)、光宮(てるのみや・後の高松宮)の三皇太子と他に久邇宮などの五皇族を含む学習院初等科生二六〇余名が本校に立寄られた。昔風の表現をすれば「本校は二代にわたって皇太子殿下行啓の榮に浴した」ということになるが、今回は意味が異なっていた。四十四年の皇太子台臨は本校の御視察そのものが目的であったのに対し、今回は香取神宮参詣などの修学旅行の一環としての忠敬遺品見学が目的で、その展示場として本校を使用したということであった。それにしても、十一月一日から県の下検分、校舎内外の消毒作業等は前例の通りであった。ただ、大勢の小學生が一緒なので、奉迎の細部は前回とは異なっていたようである。

当日は、午後一時すぎに本校に到着され、図書室に陳列された遺品を伊能三郎右衛門が陪席して齊藤千代三郎教諭が御説明申し上げ、二時頃還啓された。この遺品の選定、陳列法説明法などに、前年開かれた忠敬記念会の経験が役立ったであろうことは、想像に難しくない。なお、昭和天皇は昭和四十八年十月、本校が若潮国体のハンドボール会場になった際に御臨席になつていたので、本校には二回おいでになったことになる。

〔平成13年3月31日佐原高校百周年記念事業実行委員会編〕

地域史料

伊能忠敬の江戸在住日記(二〇)

佐久間 達夫

原本 忠敬先生日記 五十一

文化三年(一八一六) 続

一〇月二日 晴 午後青木勝次郎帰宿 今日量地場所にて船三艘用意測量有之

同 二三日 曇 今日測量 中川御番所通新宿(葛飾区新宿・にいじゅく) 渡場迄にて御府内測量全相済候事

遠国の測量では地元の負担で船の用意などされたが、中川筋の測量では、忠敬の負担で船五艘、屋根船一艘を用意し自ら出役した。地元からは船三艘手当てされたという。お膝元はいまも昔も待遇が悪いことは同じである。中川の船番所の測量ですべてを終わったという。

同 二四日 晴 左の御廻状西下刻石渡鐘太郎方より到来 速廻以八丁堀近藤儀右衛門方同居伊藤砂之助方へ順達之 尤渋江新之助殿添廻状無之

土井大炊頭殿被成御渡候御書付写
大目付へ

今未上刻

御簾中様 御安産 姫君様被遊御誕生候
此段万石以上其外向々へ可達候

十月二十三日

御出生様御養生不被為 叶今未中刻被遊
御逝去候 右に付
公方様、御台様、

今日一日 被遊 御遠慮候

右大將様、御簾中様、

今日より三日被遊、御遠慮候

一、鳴物は今日より三日停止 普請は不苦候

右の趣可被相触候

十月二十三日

同 二五日 晴 曇朝の内微雪 朝六ツ半時過より浅草御役所へ行く午前帰宅

同 二七日 晴 今日より御府内測量罷出候面々 何も出役被致候事

同 晦日 晴 村上新左衛門来る

同 一二月五日 晴 佐原村関場音右衛門来る

同 七日 晴 曇 関場音右衛門帰る

同 一三日 晴 天満屋喜兵衛来る 村上新左衛門来る

同 一六日 曇 渋川様御出 渡辺清蔵来る

同 一七日 晴 昨夜青木勝次郎来り今日より御用勤む

同 二二日 晴 為寒中見舞浅草御天文方五家

足立左内、太田才佐(助)、秋山内
記録 近藤十蔵様へ行く高橋公へ
菓子一箱上る

同 二三日 晴 堀田摂津守様、松平石見守様、

渋江新之助様、津田様寒中御見舞相勤む 林家、佐藤捨蔵方へ行く 三治郎事来年入門為致度相頼候 旁にて金五拾疋遣す 岡田作次郎来る (銭一貫文が百匹にあたる)

同 一三日 晴 妙薫津田様御屋敷へ行く長沢

太兵衛来る 長沢の老母来る 石沢又兵衛寒中見舞に来る

同 一六日 晴 保木敬藏娘今日より此方へ逗留に来る

一二月三日 晴 永沢忠四郎来る

永沢忠四郎家は、永沢治郎右衛門の娘と伊能七左衛門の粹・尚俊が、佐原村河岸に一家を構えたのが始祖である。尚俊には、三人の子がいたが、長男(号牛齋)は医者になり、他の二人は女子であったので他家へ嫁いでしまった。そこで永沢半右衛門の三男吉郎兵衛と、永沢仁兵衛軌景の養女・ソノに忠右衛門家を継がせた。吉郎兵衛は、忠四郎俊安と改名した。文政九年二月一日、六九歳で没。

同 四日 晴 今晩妙薫佐原へ下る

同 七日 曇 召仕僕清三郎今日より来る

同 九日 晴 小藤田五郎寒中見舞に来る

同 一〇日 晴 桑原内室来る
同 一一日 晴 長沢忠四郎来る 明日帰郷の由
(省略あり)

同 一三日 晴 下総国津宮村佐助来る
同 一五日 晴 松平主殿頭内奥村加兵衛来る
雁一羽贈る

同 一六日 晴 例年高橋公へ鯉巻 蛸五合遣す
藤田熊太郎へ大蛸三ツ蛸三合遣す

同 一七日 晴 今朝青木勝次郎帰宅
同 一九日 晴 左の廻状辰上刻石渡鐘太郎方より到来 早速伊藤砂之助方へ順達之

洪江新之助殿副廻状略之

青山下野守殿被成御渡候御書付写
博奕の儀近來総体に相弛候由相聞不埒付

依之町奉行並びに火附盜賊改組の者

繁々相廻り 博奕は勿論隠置等

紛敷諸勝負事厳示の穿鑿を遂げ

召捕候様申渡候 町家は不及申

所に依らず踏込召捕候儀は可有之候間

其趣をば察し銘々油断無く相改め

右体の者は早速捕置可申立候

若等閑なる致方も有之においては主人又は

町役人等不念たるべく候

右の通り可被相触候

十二月

一二月二四日 晴 門人村上新左衛門肴折樽代百

正為歳暮贈之

同 二五日 晴 例年の通 御用仕舞
同 二六日 晴 今日煤はらひ致し候事 永沢
忠四郎長子来る

同 二九日 晴 白木や安兵衛来り勘定皆済
同 三〇日 晴 千秋万歳

文化十四丁丑歳

正月 元日 快晴 年始の諸祝式 例年の通目出

度相済越年の事 内弟子中より年頭

祝義受ける 高橋様御出

同 二日 晴 年始に付連日人々相見候 是は

丁丑歳年始御祝義帳委細記之故略此

我等年始相勤候分も右日帳に委記亦

略之

同 三日 晴 年始浅草筋相勤

同 四日 曇 午前微雨 年始廻勤

同 五日 晴 曇 年始廻勤 召仕専次郎出奔

同 六日 晴 本所筋年始相勤

同 七日 晴 浅草御用始に行く

同 八日 晴 地図御用始め、川口、下河辺、

〇〇〇、永井、坂部、門谷、渡辺出

勤の事

同 一〇日 晴 夜堀田摂州侯の藩中山田幸次郎

来る

同 一二日 雨 今晩八ツ時過より乗物町より発

火 境町辺悉焼尽 大坂丁(ママ)

火止 右に付渡辺啓二郎、下河辺政

五郎、川口勝次郎相見候事

同 一八日 晴 津軽侯藩中松野茂右衛門来る
津田様へ年頭御祝義 三治郎申上る
保木同道

同 一四日 晴 暮前 青木勝二郎来る
奥村喜二郎来る

同 二五日 晴 曇 夜雨 青木今日御用勤

同 二六日 曇 青木今朝又帰郷

二月 朔日 晴 伊能七左衛門佐原より登る

同 三日 晴 今午刻青木来る

同 四日 晴 青木 今日より御用勤る 橋口

主(カ)用に付西三日屋敷へ行く

同 五日 晴 須藤甚右衛門 渡辺清蔵来る

同 八日 朝曇後晴 初午 此日初午に付御用

昼仕舞

同 一〇日 朝曇北風 此夜六ツ半時頃より深川

三十三間堂辺出火 渡辺啓次郎来る

同 一二日 晴 奥村嘉兵衛 村上新左衛門来る

同 一三日 晴 午後青木勝次郎帰郷

同 一四日 晴 夜宵召仕清助出奔其段世話人方

へ相達す 伊能七左衛門明朝帰郷

乗舟に付暮頃暇乞に来る

清助は忠敬が使つていた下男の飯炊きである。忠敬宅には内井戸がなく、共同井戸へ毎日米をとぎに出かけていた。井戸端には米とき相手に、横流し米を買い取る業者がいて、相当な量の飯米を盗まれた。飯米帳を調べた

結果では清助は一日に二升から二升・三合を一年も盗んでいたことがわかったという。悪事が知られたので出奔した。

同 一八日 曇 今日より召仕次郎来る 尤紙屋

新兵衛掛り合の事

同 一二日 曇 辰刻頃浅草御役所へ行く 暮頃

青木勝次郎来る

同 一三日 曇 天微雨 青木勝次郎今日より御用

勤む

同 一六日 終日雨 勢州四日市山中忠左衛門より

先頃種々の誂物有之候処 此節金十兩の為替状到来に付、右為請取召仕大須賀伊人差遣即持参の事 尤大伝馬町老丁目大和屋音兵衛為替に候事

山中忠左衛門は忠敏の弟子になつていて、忠敏經由で観測機器を準備して観測し、教授を受けていた。第五次測量では測量隊とともに実習もおこなっていた。

同 二七日 曇 前夜四ツ時頃青木勝次郎伯母大

病の由にて不能越候事

同 二八日 晴 桑原内室来る

同 二九日 晴 夜雨 今夜青木勝次郎来る

三月 朔日 曇 微雨午後晴快(ママ) 今日より青

木御用勤む

同 三日 晴 当日は御祝義 岡田作次郎来る

五節供御用休日

同 六日 晴 午後より高橋様、吉田様、東儀

隼人、足立左内、五段甚打小林秀介、

篠原弥吾兵衛、相見え甚至有之 秀介

より棋免送らる

忠敏は若い時に、暮は時間の無駄だといつて止めたといふが、忠敏宅で暮らしい。高橋、吉田は天文方、足立左内は手付手付、天文方と棋士の手合せといつた感じである。忠敏に名譽段位が贈られた。

同 八日 晴 かやば丁御用濟薬師参詣 三治

郎述る 先達て江川太郎左衛門様へ差上置候曆象考成下編 月離曆法並草稿共都て計式冊御返却 松魚箱一連贈給え 尤上包御家来紫厚助名前也

同 一一日 晴 江川太郎左衛門様より先頃被御

頼越候品 曆象考成下編 月離曆法、

月食曆法上、日食曆法上^四 都て計三冊

外月離及両食草稿書状共相添紙包にして出之

江川太郎左衛門は、有名な坦庵(英竜)の父の英毅である。忠敏に入門し通信教授を受けていた。書物を貸し、質問を受けている。

同 一二日 晴 曇夜雨 津宮村久保木太郎右衛門

先達而より出府致居候処 為滞留

本晩より来宿

同 一五日 曇 微雨 沢井氏失物の節同人男子召

仕の下女四品は有之段申来る

同 一九日 晴 佐原長沢太兵衛来る 同人妻一

同来る

同 二二日 曇 先達て沢井峯尾方紛失物内々相

尋候へ共一向相分不申候 然処此方にて召仕の叶喜屋兵衛妻いその少々相尋聞申し候処 昨二十日七ツ時頃より行方相知不申候故、出奔に相決候事

この部分は影印本では綴目のため確認できず。またまた盗難騒ぎに巻き込まれている。

同 一五日 晴 江川太郎左衛門様より書状来る

同 二六日 晴 曇 七ツ時頃妙薰佐原より登る

番頭又兵衛村勤伝来る

同 二九日 晴 今朝佐原又兵衛在所へ下る

同 三〇日 晴 御留守居与力田宮伝左衛門縁談

の事に付来る 甚打 小林秀介来る

伊能七左衛門佐原より登る

四月 朔日 曇 烈風 日食に付下河辺、川口、永

井、門谷御用濟後居残測量 尤俗時

七ツ半頃より凡食分二八分弱、委細別

記 但烈風雲間の測

同 三日 雨 御用濟青木駒込へ行く

同 四日 曇 浅草御役所へ行く

同 五日	雨 青木勝二郎今朝来り御用勤む 秩父大宮井上治右衛門方へ銘仙 秩父組拾正注文、金八両巻分仁朱別封にして相續出之	同 二二五日	晴曇 浅草御役所へ行く 今日より二階普請はじめ	同 二二一日	晴 韻学者井上孫六郎寓岩信好来る 寓岩 づうがむ 信好は韻学者、岡崎近在の人、伊能隊がこの地方を測量したときは、忠敬に協力し、以後江戸に出て隠宅の近くに住む。地元では謎の多い人物といわれている。
同 八日	晴 平戸侯被成御逢度段、去五日御家来衆より其段申来候付、今日五ツ半時頃罷出候事 但千秋彦右衛門、蒲生東九郎、市山恒八三人連名にての書状にて候処罷出候上にて蒲生東九郎取次被致御道筋測量里数等御尋被成候事 尤御料理被下置之	同 二二六日	曇微雨 三治郎事、林家、佐藤捨藏方へ為致入門習子に相頼 今日七時頃より引越事 妙薫 保木敬藏同道之事内入金三百正送之	同 二二〇日	晴 門人村上新左衛門来る
同 九日	晴曇 午後青木駒込へ行く 粟生より宗兵衛来る	五月 朔日	晴 為妙薫へ暇を三治郎来る 帰りの節保木同道 三治郎事佐藤一斎方にて手習致し候に付、松平能登守様内又市殿へ入門 金式朱遣之	同 二二四日	晴 五ツ時前より浅草御役所へ行く
同 一〇日	晴 去八日平戸侯御邸へ罷出候節被下置候三河内焼(三河内焼は平戸焼のこと) 壺一、鯨宗(ママ) 胸カ 骨並今朝為請取人差出候処其俣罷帰午頃付方より為持来る	同日	晴 先達而注文遣候秩父組十足到来	同 二二五日	晴 青木病氣一円駈と無之 仍て御用所より駒込へ引取る
同 一六日	晴 村上新左衛門来る 伊能七左衛門帰国に付暇をいに来る	同日	晴 為妙薫並下女筆佐原へ下る 田宮伝左衛門来る 勢州山中忠左衛門より金四両三分村田便にて来る	同 二二六日	晴 左の廻状辰上刻、石渡鐘太郎方より到来 速刻伊藤砂之助方へ順達之 尤洪江新之助殿添廻状略之(同状略)
同 二二日	雨 青木勝二郎今朝帰郷	同日	晴 当賀御用休み 林家、佐藤一斎之塾生内田幸介、三治郎連れ来る	同 二二八日	晴 夜半頃、佐原おりて、鉄之助、又兵衛、鉄之助乳母着府
		同日	晴 堀田撰州侯の藩山田幸次郎来る	六月 朔日	おりて引越に付、三治郎来り明日帰塾 申下刻石渡鐘太郎方より左の御廻状到来、速刻芝三田魚籃下吉田孫太郎方同居寺町三喜方へ順達之 洪江新之助殿添廻状如例略之(同状略)
		同日	晴 今夜青木勝次郎来り明朝より御用始める	同日	曇午後晴 佐原又兵衛帰郷
		同日	晴 左の御廻状申上刻 石渡鐘太郎方より到来、速刻伊藤砂之助方へ順達之 尤洪江新之助殿添廻状略之		

同 六日	曇風 今夜子一刻土用に入る 公儀御中陰中(死去後四九日の中) 故表向暑中見舞無之	同 二九日	方に付今夕方より来る 晴曇 孫三治郎事佐藤一斎方致出塾 今日より此方へ引取候事、右に付保木敬藏迎勞罷越	同 一〇日	終日大雨 夜に至りて猶不止
同 七日	曇晴 信州佐久郡香阪(ママ)村佐藤房(カ)右衛門来る	同 三〇日	曇後晴 大槻玄沢老御出	同 二二日	晴天 二百十日
同 一二日	夜曇 岡田幸二郎為暑中見舞来る	七月 七日	終日雨 当賀 御用休み	同 二二日	晴天 二百十日
同 一二日	晴 浅草御役所へ行く、井上孫六郎寓岩信好来る	同 一日	松平大膳太夫様御家来有馬詠治(萩の喜惣太の孫 入門 祝金貳百足贈る 是より度々稽古に入来	同 二二日	晴天 村上新左衛門来る
同 一三日	晴曇 松平主殿頭様藩中奥村嘉兵衛来る	同 二二日	晴天 松平主殿頭様藩中田口弥三郎来る 葦山江川様より 先頃差上置候曆書三冊、草稿二冊御返却	同 二二日	曇微雨 青木勝次郎暮頃出府
同 一七日	晴天 小浜長(カ)五郎様家中大沢勝右衛門門人三宅八郎右衛門来る 砂糖一曲送る 佐原関場音右衛門出入に付出府	同 一四日	晴天 今日より盆中御用休み	同 一五五	曇微雨 今日より青木御用勤む
同 一九日	晴 左の御廻状申中刻石渡鐘太郎方より到来、速刻三田魚籃下吉田孫太郎方同居寺町三喜方へ順達之 尤渋江新之助殿添廻状 如例略爰	同 一六日	晴天 今日より御用勤む 浅草御役所へ罷越 江川様より御頼越候地球銅板全図相調、代金五百匹	同 一九日	大曇 御府内地図大成に付上納 御用済より青木駒込へ行く
同 二二日	曇 渋川助左衛門様御出	同 一七日	晴天 地球図江川様本所御屋敷迄差出、夜佐原より訴訟一件に付関場音右衛門着府	江戸府内図がいよいよ完成し上納された。	
同 二二日	晴曇 寺沢善藏来る	同 二二日	晴天 地球図江川様本所御屋敷迄差出、夜佐原より訴訟一件に付関場音右衛門着府	同 二二日	晴天 青木勝次郎門弟詠治 今日より御用相勤む 尤日々通い勤候事
同 二二日	晴 林家佐藤一斎方へ行く	同 二六日	曇 寺沢善藏来る	同 二六日	曇 寺沢善藏来る
同 二四日	今日より画工田中朗郷(カ)来り御用勤む	同 二七日	晴天 青木勝次郎今朝帰郷 佐原藤左衛門来る	同 二七日	晴天 青木勝次郎今朝帰郷 佐原藤左衛門来る
同 二六日	晴 平戸侯被為下候付今日ハツ半時より舟にて罷出る、保木敬藏同道(平戸侯より再度の呼び出しである)	同 晦日	曇 左の添廻状夜半頃石渡鐘太郎方より到来速刻神田弁慶橋、松枝町家主徳兵衛店関初太郎方へ順達(回状略)	同 晦日	曇 左の添廻状夜半頃石渡鐘太郎方より到来速刻神田弁慶橋、松枝町家主徳兵衛店関初太郎方へ順達(回状略)
同 二八日	曇 召仕大須賀伊八病氣にて、先達より深川紙方へ参越療養居候処、快	同 一九日	晴天 門人有馬詠治、村上新左衛門来る	九月 七日	晴天 川口勝二郎松魚(鯉のこと)一

尾贈る 奥州三ノ戸の人、京師小島典悦門人松尾貞治来る 菓子一箱贈る小島書状持参

着又五ツ時頃蝦夷会所へ帰る

このあと、間宮は食い扶持を持参して、忠敬宅に住み込む。持参データをしっかりと引き継ぐためだったろう。

同日 九日 晴曇夜大雨 当賀御用休み 為当賀、岡田幸次郎、清水伝左衛門、小藤田五郎、谷口月窓、大橋宗徳来る 右の返祝、名代三治郎差遣す 地主へ同人差遣す

蝦夷地残部の測量を委嘱していた間宮林蔵が測量データを持参し帰着した。忠敬は喜んだろう。夕刻七時頃着いて、八時頃宿舍の蝦夷会所に引き揚げている。到着挨拶である。

孫の三治郎 忠敬の名代をつとめはじめ。

同日 一二日 晴曇 御用済より橋口郁三郎屋敷へ行く 昼後肥前島原藩中奥村嘉兵衛来る 菓子持参 九州六分の図並びに島原領十間一分之地図を頼来る 三月迄滞留の由、夫迄に仕立を頼帰、内々にて致可遣旨約束す

同日 一五日 終日曇晴 午後間宮林蔵来る 伊能七左衛門来る
同日 一八日 雨降 下総津宮蟠竜(久保木清淵)来る 弥三郎来る 間宮象限儀注文する 曇天 柳屋へ行く帰路玉垣相撲を見る 久保木蟠竜来る
同日 二〇日 曇天 内弟子願の通被仰付(橋口郁三郎の内弟子許可)
同日 二二日 晴曇 午後橋口屋敷より帰る
同日 二三日 曇晴 浅草司天台へ行く 但し内弟子橋口郁三郎連れ御礼に行く
同日 二四日 晴 内弟子橋口郁三郎今日より御用相勤む

同日 一〇日 雨 奥州三ノ戸松尾貞治来る
同日 一四日 晴 浅草御役所へ行く
同日 一五日 晴 神田明神祭礼為見物三治郎おりて哲之助、磐町(ママ)へ行く

島原藩から九州だけの中国と藩領部分の六千分の一図を三月までに仕立てて欲しいと頼まれて内々で約束する。しかし、忠敬は翌年四月に亡くなっているから、この約束を果たせなかった。のちに九州一円の図が渡されたことは内弟子・箱田良助の受け取りがあつて明らかである。

同日 一六日 晴 門人有馬詠治来る
同日 一七日 曇 佐原柏木音右衛門出府
同日 二二日 曇夜大雨 高橋公へ佐原より送来る 鯉一尾上る

同日 一三三 曇時々雨降る 伊能七左衛門来る 但し明後日帰村に付暇乞に来る 夜六ツ半時頃間宮林蔵来る 日熊(ママ)飛くまの皮一枚 南部島(縹)二反 三治郎、哲之助へ一反宛 南部鉄瓶老ツ妙薫へ

同日 二六日 朝曇午後晴 総州津宮邸加納屋治兵衛来る
同日 二九日 晴 青木勝次郎来り御用地図板借用帰宿

同日 二六日 晴 久保木蟠竜帰郷
同日 二七日 晴 大野弥三郎来る

同日 二六日 朝曇午後晴 総州津宮邸加納屋治兵衛来る
同日 二九日 晴 青木勝次郎来り御用地図板借用帰宿

同日 一三三 曇時々雨降る 伊能七左衛門来る 但し明後日帰村に付暇乞に来る 夜六ツ半時頃間宮林蔵来る 日熊(ママ)飛くまの皮一枚 南部島(縹)二反 三治郎、哲之助へ一反宛 南部鉄瓶老ツ妙薫へ

同日 二六日 朝曇午後晴 総州津宮邸加納屋治兵衛来る
同日 二九日 晴 青木勝次郎来り御用地図板借用帰宿

同日 一三三 曇時々雨降る 伊能七左衛門来る 但し明後日帰村に付暇乞に来る 夜六ツ半時頃間宮林蔵来る 日熊(ママ)飛くまの皮一枚 南部島(縹)二反 三治郎、哲之助へ一反宛 南部鉄瓶老ツ妙薫へ

同日 二六日 朝曇午後晴 総州津宮邸加納屋治兵衛来る
同日 二九日 晴 青木勝次郎来り御用地図板借用帰宿

同日 一三三 曇時々雨降る 伊能七左衛門来る 但し明後日帰村に付暇乞に来る 夜六ツ半時頃間宮林蔵来る 日熊(ママ)飛くまの皮一枚 南部島(縹)二反 三治郎、哲之助へ一反宛 南部鉄瓶老ツ妙薫へ

一〇月朔日 晴曇 日食測量委曲別記
同日 六日 晴曇 伊能七左衛門出府
同日 九日 曇午後雨 渡辺清蔵来る
同日 一〇日 曇晴 早朝渋川様へ行く
同日 一一日 曇午後雨 夕六ツ半時頃間宮林蔵帰

同日 一三三 曇時々雨降る 伊能七左衛門来る 但し明後日帰村に付暇乞に来る 夜六ツ半時頃間宮林蔵来る 日熊(ママ)飛くまの皮一枚 南部島(縹)二反 三治郎、哲之助へ一反宛 南部鉄瓶老ツ妙薫へ

同日 一〇日 曇晴 早朝渋川様へ行く
同日 一一日 曇午後雨 夕六ツ半時頃間宮林蔵帰

同日 一三三 曇時々雨降る 伊能七左衛門来る 但し明後日帰村に付暇乞に来る 夜六ツ半時頃間宮林蔵来る 日熊(ママ)飛くまの皮一枚 南部島(縹)二反 三治郎、哲之助へ一反宛 南部鉄瓶老ツ妙薫へ

同日 一〇日 曇晴 早朝渋川様へ行く
同日 一一日 曇午後雨 夕六ツ半時頃間宮林蔵帰

同日 一三三 曇時々雨降る 伊能七左衛門来る 但し明後日帰村に付暇乞に来る 夜六ツ半時頃間宮林蔵来る 日熊(ママ)飛くまの皮一枚 南部島(縹)二反 三治郎、哲之助へ一反宛 南部鉄瓶老ツ妙薫へ

同日 二六日 晴 津軽藩中松野茂右衛門来る
同日 二七日 晴 御小人目付春日井忠次郎来る 土州侯地図の事を談す

世話役須藤右衛門来る

二月朔日 晴 為寒中見舞高橋様、秋山様、太

田勝衛へ行く 三宅八郎右衛門来る

同日 晴 為寒中見舞、林大学頭様、堀田

摂津守様、松平石見守様、渋谷新之

助様、渋谷助左衛門様相勤

同日 晴 寒中為見舞、馬場左(ママ)十

郎来る

同日 五日 曇雨 為寒中見舞、足立左内来る

同日 四日 晴曇 宵より終夜雪積る事凡五寸

同日 五日 曇時々晴、昨夜之雪にて我等不快

同日 一六日 晴 我等病氣快然

同日 一八日 晴 青木勝次郎来る 地図二十二枚

持参明日帰郷

青木は自宅でも地図仕立てをしていたことがわかる。

二十二枚はこの地図かわからないが、九州第一次測量の大・中図だと枚数が合致する。

同日 二〇日 晴 間宮林蔵今日より蝦夷会所へ引

越す

泊り込んでいた間宮林蔵は、データなどの引継ぎを終わって蝦夷会所に戻る。

同日 二二日 晴 門人村上新左衛門来る

同日 二三日 晴曇 田口弥三郎来る

同日 二四日 晴曇 夜渡辺清蔵来る

同日 二五日 晴 如例今日御用仕舞

同日 二六日 晴 今日煤払い致候事

同日 二八日 晴 昨夜より午後迄趣町筋類焼

同日 二九日 晴 白木屋安兵衛来る勘定済

千秋萬歳

ここで忠敬の日記は終わる。死去は四月二三日だった。忠敬宅に住み込んで忠敬を補佐していた内弟子・箱田良助は、年が明けた頃は忠敬の体調はよくなったと記しているから、春先になって急変したかも知れない。

――終――

謝辞

佐久間氏の江戸日記連載がわかりました。ありがとうございました。いろいろございました。忠敬の江戸の隠宅には、まことに多彩な人士が入り込んで、忠敬に集まる情報の密度の濃さを感じさせます。

途中から、伊能忠敬銅像建立報告書保存版に収載することになり、渡辺と伊藤栄子編集委員が加筆しましたが、原文の解説はたいへんなことでした。佐久間、伊藤二両所にあらためて敬意を表します。校訂済みの全文は保存版に載せて、全国主要図書館に銅像建立事業の一環として寄付いたします。

先日、佐倉の歴史民俗博物館で伊能家の番頭だった柏木久兵衛家文書の調査(本号五五頁参照)をおこないましたが、そのなかに近藤重蔵旧蔵の長崎絵図がありました。美麗な絵図でした。

江戸日記には近藤重蔵はちよくちよく登場しま

す。忠敬さんは朱印帳を貸したり、伊能図も貸し出しています。多分、これは写が作られたでしょう。そういうおれに長崎絵図が渡されたような感じがします。そして柏木さんに渡ったのではないのでしょうか。

間宮林蔵とは九州第一次測量帰着後、第二次出発までに八回逢っています。そのうち一回は忠敬の訪問で、儀礼的なものでした。あとは間宮からの訪問で、そのうち四回は夜訪ねています。天測を習っていたことが分かります。

しかし、いつぼうで、間宮は北海道に象限儀を持っていたのであろうかという疑問もわきます。六分儀を持っていたことは分かっていますが、象限儀なしでは観測精度が上がらないのでは、なぜと考えるとしまいます。

江戸日記は、こうやって、登場人物と対話しながら、忠敬さんが書き残してくれなかった部分を埋める作業にとつては宝庫です。あるいは、エーッ、うちの先祖も忠敬を訪ねている!というような話もあるかも知れません。よろしく。

(渡辺 一郎)



清瀬市の織本病院劇団

演劇「伊能忠敬」を公演

渡辺 一郎

清瀬市にある織本病院は、なかなかユニークな病院である。病床二〇〇の総合病院なのだが、名誉院長の織本さんは芝居好きで、特にチャンバラが大得意である。院内に劇場設備があり、職員による劇団を持っていて、年に一度関係者を招待して大公演をやる。はやく言えば年に一度のお祭りのような感じである。病院で演劇祭、たしかに変っている。

名誉院長が脚本、演出、主演と全部やる。しかし、舞台では主演は控え目で、周りの連中が主になって進んでゆく。主演女優は看護婦長さん。なかなかの名演技である。客席は約二〇〇席。土日を使って三回公演。ということなのだが、道具立てはすべて揃い、素人芝居の域を脱した大芝居である。

昨年の夏、連絡があつて、面識はなかったが、清瀬の織本病院の名誉院長さんが、会いたいとのこと。来訪されたので伺ってみると、今年の公演に伊能忠敬をやりたいので、御指導を願いたいとお話だった。これまでのテレビ、演劇、映画のお相手で、気に入らないことも多かったし、面白い話なので相談に乗ることにした。

はじめは半信半疑だったが、伺っているうちに分かってきた。織本さんはチャンバラを演ずるのが大好きなのである。しかし、チャンバラだけの劇はないから、歴史上の人物に題材をとって劇をやりながら、そのなかにチャンバラを入れるのである。伊能忠敬にも馬庭念流の達人という仕掛けで、チャンバ

ラをさせている。

織本さんは、お父さんも医者だそうですが、千葉医大を卒業すると、親父の手伝いから始めて独立し、現在の場所に医師二三名の堂々とした総合病院を経営されている。いまは財団になっており、お嬢さんが院長兼理事長をつとめる。それで名誉院長らしいが、どうしてどうして実力者である。今年八〇歳、普段は白衣を着て診療に従事し、病院経営にあたっている。私より小柄の穏やかな人柄で、どこにそんなスタミナがあるのか、と思われる方だ。

「忠敬と伊能図」「伊能忠敬の歩いた日本」を差し上げたが、二度目に出でるときは「伊能忠敬の歩いた日本」が一番参考になるといつて、付箋だらけにして、書き抜きをつくり、熱心に質問をされた。

おそろしく熱心なので、少しあきれたのだが、本業も真面目にやっていて、月一回、腎臓病教室を開いて希望者に院長が講義をしている。私も腎臓が悪いので、三度目はこちらから聴講と診察を兼ねて出向くことにした。講堂は満席で、腎臓食の作り方を、お嬢さんといつても五〇歳少し前の院長が講義し、あと職員が実演して全員に試食をさせてくれた。

帰りには、納入業者から、サンプルのお土産を調達し配ってくれる。この仕事は、患者を減らす仕事で、どう考えても売り上げには結びつかないから、医は仁術を実行していることになる。

診察を受け、病院内を見学したが、最新の器械があるある……。これは大変と思つて、これらはリースですか、と失礼なことを聞いてしまったが、ウチはリースはやらない。あれは高くつくから、とキツパリとした返事。経営については、やっぱり伊能忠敬なんだな、と思う。

病院の外見はたいしたことはないが、院内はたいへん清潔で、看護師は若い人が多く、キビキビと動いている。あとで分かったのだが、講堂で、演劇をやつていても、パーテーをやつていても、病院は平常どおり運営されており、何

事もない感じである。案内してくれた秘書が、ここは病院です。何時緊急事態が起こるか分からない。その対応は出来ている。演劇の稽古をしていても一報があれば、すぐ白衣をきて飛び出すとのことだった。

寝たきりの方の専門病棟があったが、看護師二人で無理なく入浴させられるよう、モノレールが付き、浴槽も自動操作できるよう、近代化されていた。機械は高そうですね。この器械の購入はだれが決めるの、と病棟の婦長さんに聞いたところ、八〇〇万くらいです。私たちが展示会を見てあるいて決めたのですという。責任を持たされているので、価格交渉までもおこない、そんな値段では承認印がもらえないと粘るのだそうである。チャンバラも好きだけど名誉院長はなかなかの経営者なのである。

演劇に話を戻す。一〇月二六日の初日は、家内と二人で真正面に座って二時間半たつぷりと観賞させていた。ストーリーは「かわらばん」の前号に概略を書いてあるので、劇評的に感想を述べてみたいと思う。

まず、本格的な芝居なのに驚いた。衣装、メイク、音響・照明はプロが参加し、映像も充分つかって、華やかな舞台だった。講堂に臨時の花道ができ、提灯もならび本物の劇場の雰囲気であった。

当日の参会者の感想を聞き、「月刊織本」に出ている観客の反応を読むと、伊能忠敬がよくわかったという意見が多い。全体の幕前と各シーンの間で、「忠敬と伊能図」に出ている測量ルート図を大型スクリーンに映して、二人のかけ合いで、丁寧に説明し、それから劇がはじまる。

お正月時代劇でも、新国立劇場でも、映画でも、測量ルートは一度も映されていない。ここが初めてである。研究会員には知らないが、一般の人にはわからないのである。織本さん自身が忠敬を理解し、劇になる場面を探すなかで、忠敬の人生の全貌を見渡すのに大分迷ったらしい。だから、観客にわからせようと努力したのだと思う。大成功だった。アマチュアの素直さで

ある。脚本になる前に私と三回も話し合っている。

これまでに付き合った伊能忠敬関係の演劇、お正月テレビ、映画、では、ストーリーを書く前に、脚本家との打ち合わせは一度もなかった。脚本は大事である。とくに忠敬の場合、大筋をどうするかが一番大切だと思っているのだが、その世界の人たちはわかっていないらしい。

NHKさんではプロデューサーに充分話したし、主演の橋爪功さんには、わざわざ、京都までいってレクチャアし、著書も読んでもらった。しかし物語の筋は井上ひさし流の影響を受け過ぎ、いまいちだった。それでも視聴率一〇・二%を確保したのだから、やはり忠敬人気は根強い。

大石内蔵助、大岡越前守、水戸黄門なら、だれでもあら筋は知っている。だから、部分だけ取り上げても、フィクションでこしらえあげても、お話しになるのである。忠敬の場合は、関心があるけれども、よくわからないという人が大部分である。忠敬の全体をどう観客に理解させるかが難しいのである。そういう意味で、織本さんの「忠敬物語」はよくやったと思う。

それから、これまでドラマ作りをしてきた人達は、今の忠敬人気はどこからきているかを、わかっていないと思う。

伊能忠敬は、幼くして母を失い、苦勞して自分を磨き、伊能家に養子に入つて事業に成功する。隠居後は、商売と縁を切り、五〇歳から一念発起して、一七年かけて日本初の実測地図を作ったという、偉大な凡人の人生が、高齢化社会のなかで話題となっているのである。

最近では、色々な媒体を通じて伊能図を目にし、伊能測量のやり方を聞いて、あらためて、その努力の大きさを感じ、自分の余生にも何らかの参考にしたいと考える中高年が多くなっている。また一方では、日本中歩いて地図を作った。へーすごいな。という小中学生も増えているのである。

だから、忠敬の人生をわかりたいと思ってドラマを見る。ところが脚本家は多分、忠敬の全体を描く自信がないのだろう。芝居で見せよう見せよう



とする。井上ひさしの「四千万歩の男」から、お芝居を抜き出して、つなぎ合わせようとする。だから伊能家ホームドラマじゃないの、なぞといわれるのである。

たいした制作費をかけられない伊能忠敬のドキュメント番組が良い視聴率を稼ぐことを考えると、教養番組の要素の強い忠敬ドラマを作ると当るのではないかと思う。

織本さんの「伊能忠敬」は、幕間のおしゃべりが少し長い感じがするが、説明を丁寧にして成功したと思う。劇は大きくはないが、みな好演だ。脇役が舞台を支え、主役があまり動き回らないのも忠敬劇らしくていい。忠敬も後半は殆ど下役、内弟子に任せていた。

将軍上覧の場は、場面の作り方は簡単すぎるが、本邦初演である。この場面を演じたことに拍手を送りたい。この場面は、NHKにもお願いしたが、将軍の御殿を作る予算が大変だと断われた。将軍上覧は忠敬の人生最大の見せ場である。これにより、幕府事業に昇格し、大測量のキツカケとなった。どうしてプロがとりあげないのか理解できない。

忠敬が将軍と口が聞けるはずはないとか、地図は廻って見るのでなければとか、天文方が列席しないのはおかしいとか、細かくあげればいくらでもある。しかし、だから難しいといって、やらないよりは、問題があつてもやるほうがよほどましである。お得意のチャンバラ場面。織本さんには反省点がいろいろあるらしいが、素人目には上手いものだとおもう。よくまあこんなに来るものと感心するばかりである。

速報

○佐倉の歴史民俗博物館で柏木久兵衛家文書を調査

伊能家の番頭だった柏木久兵衛家の文書が佐倉の国立歴史民俗博物館に寄託されていることは分かっていたが、なかなか調査の機会がなかった。

このたび、柏木家の子孫の柏木隆雄氏が入会されたので、これを機に調査することとし、左記のとおり調査をおこなった。

- 一、調査日 二〇〇二年二月一〇日 一〇時—一三時
- 二、場所 国立歴史民俗博物館
- 三、資料点数 五九点
- 四、参加者 歴博 山本助教
研究会 渡辺、伊能、佐久間、伊藤、柏木の各氏
- 五、調査要領

資料を一点づつ開いて、内容を確認し、資料価値があると思われる文書、絵図類を写真撮影した。内容については後日文書を解説の上で報告することとした。

(調査概況)

この文書は、柏木家独自の文書はごくわずかで、大部分伊能忠敬文書であった。忠敬の筆跡と思われる文書も二、三点ある。参詣した社寺が由来、宝物などを書き上げた文書が数点あり、大和の長谷寺が天文御中として提出したものがあつた。

高橋景保が吉雄某にあてた書簡があり、何か新しい事実が出ると面白と感じた。絵図では小豆島、長崎絵図、法隆寺伽藍図はすばらしい絵図だった。長崎絵図は近藤重蔵の旧蔵品であつた。(渡辺)

「筑前の長崎街道を歩くつどい」

歩行回数が一〇〇回に

松尾 昌英

一〇〇回を迎えた歩くつどい

平成四年三月筑前の長崎街道ルートを満八ヶ年をかけ調査発表し
たとき、今後本書のルートにより、月一回忠実に歩くことの提案が橋
本政一氏（現在筑前の長崎街道を歩くつどい代表）よりありました。

しかし、当時の冷水峠の鍋峠は昭和三十七年国道200号線が開通以来、
村人の立入りもなく、雑草木の繁るにまかせ途絶されていましたので、
このルートを一年半かけて開鑿いたしました。この場所はシーボルト
も難渋したことが江戸参府紀行に記述されています。

平成五年十一月十四日鍋峠が開通した日「ナノミ」三十本を記念植
樹し冷水峠越をした日を第一回として現在に至っております。

平成八年六月多年探し求めていました伊能大図の筑前版（下絵図）を
佐久間達夫氏より寄贈していただきましたので、早速これを解析した
ものを平成九年十一月「伊能大図による筑前の長崎街道の追跡」とし
て刊行いたしました。爾来このルートを正式長崎街道として只管歩き
つづけ、今回一〇〇回の記念日を迎えることになりました。

記念行事は去る十月六日に28名が参加して、JR篠栗筑豊本線桂川
駅から出雲、長尾、阿恵、横山、小深田から内野宿へ歩きました。こ
こで宴会を開き一〇〇回記念を祝いました。

「筑前の長崎街道を歩くつどい」は伊能大図による長崎街道を頑し
に忠実に歩いています。来年（平成十五年十月）は発会十周年になり
ます。これからも歩きつづけたいと思います。

歩くつどいのみなさん・内野宿にて



筑紫野の街道図



筑紫野の街道

今なぜ、長崎街道を頑しに歩くのか？とよく質問をうけます。その
ときは次のように答えています。それは「伊能大図による街道ルート
が本当の長崎街道だからです」と。

私が街道調査をはじめた昭和五十九年以前は、長崎街道の文献や資料
にはルートを記入したものは皆無であり、各宿場を点としての説明の
みで点と点を結ぶ線はありませんでした。

長崎街道を歩くキャンペーン等に何回か参加しましたが、その都度

ルートが変っていることに不審をいただき、案内の方に究明したところ、実は誰もわからず、暗中模索の行動であることが判明したので、これは一日も早く消え行く街道の本来の姿をはっきりさせ、次の世代に伝えることを決意しました。この決意は今も変わりはありません。

長崎街道のルートは時代考証がまちまちである憾がありますが、伊能大図の出現によりこれが本場の長崎街道であるとすべきことがわかりました。

その理由は、伊能忠敬は幕命により日本国中を測量したものであり、長崎街道は参勤交代の官道であります。使用した物差しは、折衷尺（一尺を三〇三、〇三〇）であり、これは現在のメートル尺に期せずして一致しております。

今後日本の街道調査は伊能大図を使用すれば一八〇〇年代の一線に統一する事が出来ます。この時代以前に諸大名が幕府に献上した各藩及びその他の図面はいずれも絵図に等しいもので現代図に写すことは出来ません。

平成九年十一月発表した「伊能大図による筑前の長崎街道の追跡」は伊能本家の倉庫より佐久間達夫氏が発見した伊能大図（下絵図）を検証した筑前版であり、日本に於ける伊能大図を現在図に立証した第一号であると認めていただきました。

因みに現在図の北九州市と明治三一年の北九州市の陸測図の一万分の一の図面に伊能大図の長崎街道一万分の一に拡大した図面を重ねると完全に一致しました。

すなわち約一〇〇年前の陸測図と二〇〇年前の伊能大図の長崎街道が重なったこととなります。

そのためこの一〇〇年間長崎街道に変化はなかったことになり、北九州市は明治三十年代までは長崎街道が一本しかなかった事になります。

す。誠に感服の至りであります。

平成十三年三月三十日渡辺一郎代表理事が米国ワシントンの議会図書館で二〇六枚の伊能大図を発見されました。伊能図探求に対する努力の賜物であり、歴史に残る功績と思われれます。そして平成十五年秋には日本にその伊能大図の帰国が伊能忠敬研究第二十八号（二〇〇二年）に報道されております。

この図面が帰国することになり、長崎街道の図面をいただき一日も早く本場の街道ルートを記録することを一日千秋の思いで待機いたしております。

そしてこの機会に提案したいことがあります。

それは伊能大図の帰国後各県毎にこの図面により日本の街道を現在図の一万分の一に再現する一大イベントを企画したいと思ひますが如何なものでしょうか？

いろいろと困難な事態が続出すると思いますが、二十一世紀の伊能忠敬研究会の独自の基盤をつくるため「伊能大図による日本の街道」をつくる研究を実施することを懇請したいと思ひます。

シーボルトの通った冷水峠の中の鍋峠の現況について

文政九年（一八二六）二月二十日、フィリップ・フォン・シーボルトが冷水峠の最大の難所とされている鍋峠で難渋したことを江戸参府紀行にしているされています。「われわれが山岳地帯へ深く進むにつれて、絶え間なく降る雨のために道はいっそう苦しくなってきた。人馬の敏捷さと確実さは驚くほどであるが、細く険しく滑りやすい山道をよじのぼるのは気の毒なことであった」。

鍋峠の入口には茶屋があった。山家宿を朝立ちした旅人は約四⁺を歩き、ここで一服し体調を整え、この難所に挑んだという。

筑前国続風土記に次の記述がある。

(一) 大鍋小鍋

「山家の東にあり、川流三十間の大岩ありてその上を流る、岩の両方ハ土に埋れて見えず、岩の窪き所ハ深くしてはかるべからず、又鍋の口の如くなるあり、人工の如し、是も奇観に備ふべし」とある。この淵は水流により渦をまき、恰も鳴戸の渦潮のようであったと古老の言伝えがある。

茶釜石と証明者の井上齊氏



筑前国続風土記拾遺にこの地に奇岩、奇石ありと記されている。

(一) 四寸岩

シーボルトが長崎街道中最大の難所といわれた箇所である。岩山と

河川敷の山裾に道巾四寸の街道があり、これを簡易籠で通行したという。この道筋の岩山は国道200号線の建設により石材として取崩され、一部が200号線の山裾に残っている。

(二) 茶釜石

200号線の山上にあった四寸岩は、工事建設のとき所在不明となっていたが、平成七年四月二八日橋本政一氏が道路下の草叢の中に埋れていたものを発見した。

この鑑定には現地に父祖の代より居住している井上齊氏に依頼したところ真正銘の茶釜石であることが証明された。

平成一〇年二月一八日大根地神社宮司による入魂式を挙行、毎年祭祀を続けています。鍋峠の入口の茶屋跡より四寸岩に至る約八〇〇坪の街道は前述の如く200号線の開通により冬眠いたしていましたが「筑前の長崎街道を歩くつどい」によりこれを開鑿しその後年中行事として年二回の街道整備を続行、今年で十周年を迎えることになりました。

来年(平成十五)の十月五日(第一日曜日)は冷水峠を歩きます。そして茶釜石の鎮魂式を実施する計画です。

九州の箱根と称する天下の剣、国道200号線建設により埋もれた冷水峠、道中四寸だったと言う四寸岩を歩いてシーボルトをはじめ先人達の労苦を体験してみたいかがですか。是非おすすめていたします。

(筑前の長崎街道を歩くつどい・顧問)

編集部注・長崎街道冷水峠につきましては諸説のあるところです。

ご参考にして下さい。

佐原支部便り

長久保赤水の地図を訪ねて

本郷 靖枝

「この道は、忠敬が歩いた道です」出迎えて下さった長久保片雲氏は、私達のバスが通って来た道を示された。

十一月二十四日、佐原支部の今年の日帰り研修は、隣県茨城に長久保赤水の地図と西山荘を見学すると云うもので、講師には、会員の佐久間先生があたられた。

常磐高速道の両側の山々は、名残りの紅葉が美しく、ピラカンサの真赤に続く分離帯に喚声が上った。午前中は、高萩市歴史民族資料館を見学、午後は同市赤浜に赤水の旧家を訪ねた。

長久保赤水（一七一七～一八〇一）は、水戸領常陸国多賀郡赤浜村（現高萩市赤浜）に農民の子として生まれ、名越南溪に学び、徂徠学、朱子学を修め、水戸藩主徳川治保に仕えた。地理学に関しては、江戸時代後期の権威者とも云われている。伊能図が完成する凡そ半世紀前その大部分を情報収集によって作成されたと云う地図は驚きであった。案内していた片雲氏は赤水の遠戚に当る方である。先ず、赤水一族の墓を訪ねた。波の音が聞こえそうな防砂林の中である。その後、赤水の育った旧家を訪問した。現在当主の方やご家族の方が迎えて下さり、思いがけず、「改正日本輿地路程全図」の実物を拝見することが出来た。その他肖像画や書籍、特に江戸時代の紀行文「長崎行役日記」「安南国漂流記」等、貴重なものを見せていただいた。

片雲氏の説明によれば「赤水図は、全国を測量して作った伊能図と

は異なり、大部分が情報収集によって作成したものであるから、科学的正確さの面では否定されがちである。だが、その実用性と活用された面からみれば雲泥の差がある。幕末の指導者吉田松陰も大いに活用されていたとの手紙類が残されている」との事であった。

旧家を辞し西山荘を見学した。西山荘は、水戸光圀が元禄四年（一六九一）から一三年までの十年間余生を送り、「大日本史」を編纂した場所である。尚、光圀の娘「さわ」女が佐原の伊能権之丞家三代景胤に嫁いでいることで、伊能家の往時が忍ばれる。

日足の短い秋の日がすっかり暮れた六時頃帰着した。地図の持つ意義と面白さ、各々の思い入れの様なものを感じた研修であった。

（ほんごうやすえ・元佐原市福祉事務所長）



長久保赤水旧家



赤水図

『入船山記念館』訪問記

石川 清一

支部恒例の有志による研究旅行は、十月三十、三十一日、本年度は伊能隊の測量の様子を描いた絵巻物「浦島測量之図」で有名な広島県呉市の「入船山記念館」を訪れた。ちょうど呉を訪問中の伊能洋・陽子ご夫妻、井上靖子さん一行と一緒した。

伊能さんは母方の祖父、伊地知海軍中将が第十一代呉鎮守府長官をしたご縁で、先年、軍服などゆかりの品々を呉市立の入船山記念館に寄贈されている。今年呉市の市制百周年記念行事で、ご招待を受けていたが延び延びになっていたものが今回実現したもので、ちょうど計画中の支部旅行を合流させて頂いたものである。

三十日は十時半に呉駅に到着し、呉市や記念館関係者との歓迎行事を済まされた伊能さん一行と合流し記念館に向かった。解説を聞きながら「浦島測量之図」を拝観した。本で見るとよりやはり迫力がある。虫食いで痛んでいるが彩色は鮮やかである。ここで私には大きな収穫があった。今まで本で観ていた時には気づかなかったが、描かれている大勢の人物の中に『わらじ』を数十足担いでいる人を見つけたことである。実は九月に福岡市の小学校で「伊能忠敬地図づくりの旅」の話をする事になり、伊能図のほかに、生徒を飽きさせないようにと切手や進学塾の広告など小道具に加えて『わらじ』を見せた。『わらじ』がなければ地図づくりの旅はできなかった。「たくさんの『わらじ』を



入船山記念館事務所にて

使ったおかげである」と。私にとって思いもかけない発見だった。

その後、今は「入船山記念館」になっている旧呉海軍鎮守府長官官舎(重文)を案内頂いた。イギリス風の洋館部には非常に珍しい金唐紙(きんからかみ)が張られ、豪華な造作に往時が偲ばれた。私邸部分の和館部はたくさんさんの部屋をもつ堂々たる建物で、井上さんには幼少の頃の記憶が残る懐かしい建物で感慨無量のご様子だった。

昼は呉が発祥の地といわれる?海軍料理で有名な「肉じゃが」と「カレーライス」を食べた。肉がやわらかく、普段見慣れているカレーライスというよりもハヤシライスのような色と味だった。実は先日、昼のテレビ番組で呉市が紹介され、そこでこの食べ物が紹介されていたので、呉ではこれを食べなきゃと。念願がかなって美味だった。

続いて一行は市ご配慮のバスで館長さん他の案内で当時の海軍専用ダム(旧鎮守府水道、現在は市の水道に使用)を見学する。大正時代に作られ、数十年たった今でもビクともしないと聞き、あらためて旧海軍の技術力の高さに敬服した。ダムの中央真下に伊地知中將の名前の入ったプレート板を見つけ伊能さんお三方もしばし感無量の面持ち。

その後は呉市を離れ平家の清盛伝説で有名な「音戸の瀬戸」を渡り、もう一つの目的地江田島へ行く。昔日の面影をしのげる旧海軍兵学校はじめ広大な構内にある瀟洒な建物群を見学した。若くして戦争で亡くなった人たちの数々の遺品を見て、身が引き締まる思いで声なくしばし黙想。特に今回初参加の穂吉さんは兵学校在学中に終戦をむかえ九死に一生をえた方で本当に感無量のご様子だった。

呉市内の宿に入り、夕食懇談ではわざわざ東京からご持参下さった呉付近の伊能大図などをみながら一同大いに話がはずんだ。

翌日は、伊能様ご一行は朝早く次の目的地に出発され、私達も広島

で呉市の残りの観光をすませた後広島に移り平和記念公園や原爆資料館等をみて帰路についた。

今回はからずも伊能様ご一行に便乗させて頂きVIP待遇で呉周辺の代表的観光スポットを巡ることができ、楽しい研究旅行となった。それにつけても、いつもものの静かで温厚な伊能ご夫妻、井上さんには、賑やかと言うか騒々しいと言うか、我々にはさぞびつくりされ、ご迷惑をおかけしたのではと思っています。

この誌上を借り厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

(九州支部長)



江田島大講堂にて

忠敬談話室だより

○初詣 知恩院、八坂神社、天の橋立へ

渡辺 一郎

どうした風の吹き回しか、初詣に京都を訪れる気になって、知恩院、八坂神社、天の橋立へと詣でてきた。テレビでは除夜の鐘はいつも見ているが、本物は違った。

知恩院の閉ざされた山門脇の通路を登り、本堂前から鐘楼に向かう。縄を張り、整然と行列が整理され人々が続く。高台の鐘楼に近づく頃は人の波でぎっしりとなる。

停らないで。押さないで。誘導係りは声をからすが、こちらは動きようにも、身動きがとれない混雑だ。乱暴な者が騒いだら将棋倒しがおこる。こんな警備をしいていいのだろうかと思う。

いっぽう、七〇トンの釣鐘のほうは、音頭とる僧の掛け声がひときわ響くと、ゴーン。腹にこたえる大鐘の音。本物はすごい。

やがて一番狭い場所をようやく抜けて、僧が綱を引いているところに出る。十数人の僧が汗をかきながら、掛け声をかけて直径五〇センチもある鐘突き棒を引き、何回か調子をとって鐘を撞く。ひととき大きくゴーン。知恩院は除夜の鐘を一〇時から撞く。入門の締め切りは一時半という。これを一〇八個打つのはとてもない大仕事だ。

知恩院から円山公園を経て八坂神社に向かう。ここも人々。広い四条通りの車道が人で埋まり、縄を張って待たされている。隙間を縫って神社内に入り込んだが人でギッシリ。知恩院以上の混雑だ。本殿前になかなか進めない。社殿はビニールで覆って投げられる賽銭で傷つくのを防いでいる。ようやくにして参拝を済ませます。

円山公園の綺麗な割烹の前で、幼い姉弟が呼び込みをしていたので、年越しそばを食べてようやく両社の参詣を終わった。

京都から丹後までは三時間半。夜明け前に、激しい雨のなかを、天の橋立のすぐ前の丹後一宮・籠（この）神社につく。参拝のあと、境内を抜けて、ケーブルで天の橋立展望台に昇る。折りしも雨は小降りとなるが、初日を拝むことは覚束なかった。

橋立の絶景は雨上がりとともに浮かび出る。天の橋立では四度目だ。いろいろな人もいるが、日本三景の一つ。やはりいい。橋立から城崎温泉を廻って夜、東京に帰る。（二〇〇三、一、一二）

○アメリカ伊能大図展準備の進捗状況 1

大図展の進捗状況をご紹介します。

1. 推進の組織

「伊能大図（米国）展」実行委員会が平成14年3月に設置されています。役員は次のとおりです。

会長	（財）日本地図センター	理事長	大竹一彦
委員	日本国際地図学会	会長	（同右）
同	国土建設省国土地理院	院長	星埜由尚
同	伊能忠敬研究会	代表理事	渡辺一郎
（兼事務局長）			
同	（社）全国測量設計業団体連合会	会長	鈴木俊之



同	(社) 日本測量協会	会長	中川一郎
同	日本土地家屋調査士会連合会	会長	西本孔昭
同	(社) 日本ウオーキング協会	会長	岡野吉春
同	共同通信社	代表取締役社長	斎田一路
同	中日新聞社	代表取締役社長	白井文吾

2. 展覧会の形態

(1) 博物館展示

全国数箇所の博物館で、アメリカ伊能大図の現物を展示し、あわせて国内外の伊能図と伊能忠敬関連史料を展示します。

開催する博物館は、札幌、仙台、東京周辺、名古屋、神戸、愛媛の各地で準備を進めております。展示期間は各一ヶ月くらいを予定しています。

(2) フロア展示

アメリカ大図の実物大の複製をつくり、床面に日本列島を再現しようとする展示です。すべてを展示すると60m×30mくらいスペースが必要です。

3. 開催時期

平成16年度の初頭から、博物館展は各地を巡回する予定です。フロア展は博物館展の開催地、その他で開きます。

4. 伊能図ミニ情報

大図 全214枚

アメリカ207枚、日本3枚

(重複をふくめ約60枚)、

未発見は、あと4枚です。

小図 全8枚 日本に現存
小図 全3枚 日本に現存
あと4枚出てくれば、伊能忠敬の日本地図が再現できます。

5. アメリカ大図の進捗状況

順次、実験データが到着しています。これを展示用に加工する方法について検討しています。

○特報 研究会ホームページでアメリカ大図を公開

ホームページの史料室で「米国議会図書館蔵伊能大図写真集」が年末に公開されました。渡辺

代表撮影の大図が全国を十プロックに分けられ59枚が見られます。画像は縮小されていますが、拡大しても見ることが出来ます。坂本幹事の労作です。



伊能大図の複製



伊能大図の複製

◎江戶時代の測量家、伊能忠敬(一七四五―一八一八年)が完成した実測による全国地図のうち、最も詳細な「大図」の写真五十九枚を、伊能忠敬研究会がホームページ(H.P.)で公開した写真。

◎計二百十四枚あった大図の原本は関東大震災などで焼失したとされるが、大半の写しが米国に保管されているのを同研究会が一昨年発見した。

◎大図は一枚の大きさが一畳分で、公開された写真は地図の一部分。H.P.のアドレスは<http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakamo>

○日々の話題

□ホームページ掲載用ニュースから

1 共同通信社から新年用記事として「伊能忠敬すごろく」というカラ―見開き版が配信されます。全国測量中に起こった出来事をもとに作られた双六です。漫画で忠敬と伊能測量を解説しています。地方紙がどれだけ採用するかわかりませんが、20紙くらいは掲載すると思います。ぜひ御覧のうえ遊んでみて下さい。かわらばんに掲載します。

2 伊能測量の影の仕掛人・桑原隆朝さんの御子孫を探しております。伊能測量は、忠敬さんだけではなく、多数の人々の協力でおこなわれた国家事業でした。だが、そのなかで、はじめの頃大変協力した人物に仙台藩上級藩医・桑原隆朝さんがおります。忠敬の三人目の妻ノブのお父さんです。この方と忠敬の間のやりとりが、全くわかっておりません。御子孫の方に伺ったら手掛かりがつかめるのでは、と考えております。共同通信社の記事でもコールドしていますが、情報をお持ちの方、お知らせ下さい。

□ホームページのリンク集

前号かわらばんでホームページの集合を呼びかけましたが、ご返事は永野達代さんだけでした。鳥瞰図の作品集です。すでに研究会とリンクしています。見事な作品を是非ご鑑賞下さい。

伊能忠敬図書館の休憩室がオープンしています。こちらの「史跡めぐり」もどうぞ。また新しい資料をお待ちしています。

□日本国際地図学会四〇周年記念大会で表彰

会員の清水靖夫、西川治、渡辺一郎の三氏が表彰されました。清

水氏は「明治以降の近代地図の研究」、西川氏は「多年地理教育に注力」、渡辺氏は「伊能図の研究」が表彰の対象でした。本会会員は多士済々ですが、こういうことがあると、あらためてそれを感じさせられます。

聞くとところによると、副賞は「武揚堂の原寸複製伊能中図」とのことでした。同図は、日本国際地図学会と伊能忠敬研究会の監修で、著者は長岡正利、清水靖夫、渡辺一郎、小島久武の各氏で、すべて研究会会員です。ウーン……。

□石川支部誕生

金沢の河崎倫代さんから支部結成のお知らせがありました。第四次測量の加越のようを地元小中高生に訴えるそうです。現在、支部会員は河崎さんだけです。支部活動のご支援、ご声援をよろしく。

□茨城新聞から

3万5千キロのから
伊能忠敬

約二百年前に日本地図を完成した測量家、伊能忠敬（一七四五—一八一八）のブームが起きている。前半は測量家としての伊能、後半の全うな人生を五十年からの学問で歴史に刻んだ大仕事を追ったサクセス人生は、現代の中年世代のあこがれの小説。旅文化とともに伊能が作った地図が身近、身近に感じられている。本書も山ほどある。全国測量約三万五千キロの道を、すくなくで旅するつもりで読んでほしい。

伊能忠敬研究会御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。
二、つぎのような活動をおこなっております。

①会報の発行

発表誌 年三回以上、 交流誌 随時

②例会・見学会の開催

③忠敬関連イベントの主催または共催

④その他付帯する事業

三、入会方法等

入会を希望される方は、郵便振替の送金者氏名欄に住所、氏名、電話番号、FAX番号などを明記し、通信欄には専門分野、趣味分野、入会の動機、本会に対する希望など御意見を書き添えて、入金四千円、年会費六千円、合計一万円を左記にお送り下さい。

会計年度は、四月から三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度のバックナンバーをすべてお送りします。

送金先 (室番が六一八に変更。乞御注意)

〒162-0822 東京都新宿区下宮比町二の二八の六一八

伊能忠敬研究会

郵便振替口座 〇〇一五〇一六―〇七二八六一〇

投稿規定

会員は発表誌、交流誌に投稿することができます。一回の掲載は、原則として四頁〜六頁です。越える場合は分載します。提出原稿は返却しません。採否は編集部に一任して下さい。

一頁は二段組31字×26行、三段組20字×30行です。タイトルは五行分とします。写真、図表は大きさを考慮して下さい。

伊能忠敬研究会のホームページ

伊能忠敬研究会のホームページは三つあります。最新情報は大友常任理事の担当です。それぞれがリンクしています。

<http://www.2s.biglobe.ne.jp/~auto/inoh.html>

史料情報は、「資料室」として坂本幹事が担当しています。現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図などが御覧いただけます。

<http://members.jcom.home.ne.jp/t/sakamo/>

忠敬関係の図書、文献資料は「伊能忠敬図書館」です。前田幹事が担当です。忠敬の書齋、休憩室の史跡めぐりも是非どうぞ。

<http://www.tt.rim.or.jp/~koko>

編集後記

○癸羊（みずのとひつじ）年をお祝い申し上げます。癸羊を三回たりましたら、一八二三年には浅草源空寺に忠敬の墓碑が建立されていきました。会活動へのみなさまのご支援・協力にお礼申し上げます。○元日の日経新聞に、わが研究会のホームページが紹介されました。ご苦心された坂本幹事ほかみなさんのご努力に表敬します。

○今年も歴史の話題では江戸開府四百年、ペリー来航百五十年など記事がありました。このところ各地域で歴史を丁寧に紹介する記事が増えているように感じます。過去を訪ねることから、現在を知り、これからの未来の可能性を探っているならばうれしい限りです。

○四年前の平成十一年一月二九日は北風が強く快晴の一日でした。「伊能ウオーク」は東京江戸博物館から富岡八幡宮へ寄り、船橋市役所に向かいました。今年の伊能ウオーク番外編は十月に下北半島です。○暮れに西別から献上造り鮭が届きました。その味見事に納得。（F）

THE INOH TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.31 2003



NEW YEAR OF INOH MAPS	Watanabe Ichiro	1
NEW YEAR ESSAYS		
A report from Harbin : As a Teacher and a Foreign Student	Iwaki Hajime	2
My Delight of knowing new things	Sakuma Tatsuo	9
FROM VISITORS' RESISTERS	Inoh Yoko	21
MATERIALS		
Tadataka Inoh's Survey Skill	Kanakubo Toshitomo	12
Reading Document in Sawara "Kacho" (4)	Kojima Kazuhito	16
Knowledge of the Word : What is "Lunar distance"	Doi Tadao	20
Family Documents 22 : Kageyasu Takahashi	Ando Yukiko	24
Tadataka Inoh's Herald in Ezo	Horie Toshio	29
'Tadataka Inoh' in School Songs	Nariya Yoshiko	37
REGIONAL MATERIALS		
Reports on Historical Documents : Final Book of Inoh Maps	Watanabe Ichiro	35
Diary of Inoh in Edo (10)	Sakuma Tatsuo	46
TOPICS		
Drama "Inoh Tadataka" by Orimoto Hospital Theatrical Troupe	Watanabe Ichiro	53
A survey on Documents at Kashiwagi Kyubei	Editorial Department	55
100 Times anniversary of the team "Nagasaki-kaido walking in Chikuzen"	Matsuo Masahide	56
BRANCH REPORT		
Sawara Branch : A Visit to the old house of Nagakubo Sekisui	Hongo Yasue	59
Kyushu Branch : A Report on the Visit to Irifuneyama Memorial Hall	Ishikawa Seiichi	60
MEETING ROOM	Editorial Department	62

Edited and Published
by
THE INOH TADATAKA SOCIETY